

日本発達心理学会 2024年度国際ワークショップ・公開講演会 報告
国際ワークショップ：「感情（emotions）はいかに定義されるべきか？ 不可知論
が発達心理学者の選択肢ではない理由（How Should Emotions Be Defined? Why
Agnosticism is Not an Option for Developmental Psychologists）」
公開講演会：「感情発達と新しい基本感情理論（Emotional Development and the
New Basic Emotion Theory）」

日本発達心理学会国際研究交流委員会

The International Research Committee of the Japan Society of
Developmental Psychology (JSDP)

日本発達心理学会国際研究交流委員会 2024 年度委員長 松本 博雄（香川大学）

日本発達心理学会では毎年、海外の著名な研究者を講師として招聘し、国際ワークショップおよび公開講演会を開催してきました。2024 年度は Georgia State University のアンドレア・スカランティーノ（Andrea Scarantino）教授を講師としてお招きしました。国際ワークショップでは「感情（emotions）はいかに定義されるべきか？ 不可知論が発達心理学者の選択肢ではない理由」をテーマに、2024 年 8 月 3 日（土）～ 4 日（日）の 2 日間、お茶の水女子大学でワークショップを行いました。4 日（日）の午後には、「感情発達と新しい基本感情理論」をテーマに、公開講演会を開催いたしました。哲学者である先生のお考えを、基本感情理論、心理学的構成主義、評価理論といったキーワードで整理し、その歴史的経緯や最新の潮流、また先生ご自身が提唱されている感情理論について解説していただき、非常に学びの多い 2 日間となりました。

この国際ワークショップ・公開講演会は、臨床心理士、学校心理士、臨床発達心理士の資格更新ポイント付与対象の研修会として認定されました（国際ワークショップ：臨床心理士 2 ポイント、学校心理士 1 ポイント；公開講演会：臨床心理士 2 ポイント、学校心理士 1 ポイント、臨床発達心理士 0.5 ポイント）。

この国際ワークショップ・公開講演会は、様々な団体との共催によって実現したものです。公益財団法人発達科学研究教育センター（CODER）には共催機関としての助成金支援を賜りました。また、お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所からも共催機関として研究補助（grant-in-aid）を賜りました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。また、講師のスカランティーノ先生をはじめ、ホストを務めてくださったお茶の水女子大学の武藤世良先生、同じく受け入れ担当委員を務めてくださった白井真理子先生（信州大学）、石井佑可子先生（藤女子大学）、中村 真先生（宇都宮大学）、その他お力添え賜りました関係各位に改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

2024年度国際ワークショップ・公開講演会講師受け入れ担当委員

武藤 世良（お茶の水女子大学）・白井 真理子（信州大学）・

石井 佑可子（藤女子大学）・中村 真（宇都宮大学）

2024年度の国際ワークショップと公開講演会は、感情の定義や理論、発達をテーマとしました。日本語の「感情」を意味する英語は affect, emotion, feeling など複数ありますが、今回は喜びや悲しみなどの様々な“emotions”を意味する感情に焦点を当てた企画としました。なお、これに伴い、本企画では affect は文脈によって感情やアフェクト, feeling(s) は感じ・気持ちやフィーリングと訳しました。国際ワークショップでは、いまだ国際的にも合意の得られていない感情（emotions）の定義について、その歴史を辿ることで、現代の三大感情理論である心理学的構成主義、評価理論、基本感情理論それぞれが感情発達研究にとっていかなる長所と短所を持つかを考察し、なぜ発達心理学にとって感情の定義が重要なのかを検討しました。公開講演会では、講師が提唱する新しい基本感情理論（New Basic Emotion Theory : New BET）と感情発達の関係性を探りました。

講師紹介

Andrea Scarantino（アンドレア・スカランティーノ）博士は、心の哲学や感情の哲学、感情科学がご専門で、感情・情報・コミュニケーションの研究に主に取り組まれています。これまでに、2016年には米国のジョン・テンブルトン財団助成金、2015年から2017年にはドイツのフンボルト財団のフンボルト・フェローシップ、2017年にはIACAP（International Association for Computing and Philosophy）のHerbert A. Simon Award（2017）など荣誉ある賞を受賞されている卓越した研究者です。現在はGeorgia State University（ジョージア州立大学）で教授を務めていらっしゃいます。

スカランティーノ先生は発達心理学を専門とされてきたわけではないものの、感情の概念・定義・理論研究の最前線の研究者の一人として国際的に活躍されてきたことから、スカランティーノ先生との国際研究交流を企画することは、感情やその発達の研究について理論的に貢献できると考えられました。本企画は近年の感情史や「感情とは何か」をめぐる哲学・心理学界の動向とも親和性が高いため、日本の研究者が本企画を通して、感情とその発達の哲学的・心理学的・歴史的理解を深め、今後、様々な理論的・学際的知見を整理し、将来を見渡していくことも期待できました。

スカランティーノ先生の招聘計画は、2019年7月にアムステルダムで開催されたISRE（International Society for Research on Emotion : 国際感情学会）の隔年大会（ISRE 2019）を契機に始まりました。この大会でKeynoteを務めていらっしゃったスカランティーノ先生と、Keynote後の大会期間中に少しお話しさせていただき、来日を打診してみたところ、来日は長年の希望であり、日本の研究者とも研究交流をしてみたいとお話ししてくださいました。そこで、同年9月に日本発達心理学会国際ワークショップ・公開講演会の講師としての来日のご意向をメールで伺ってみたところ、ご快諾を頂くことができました。しかしながら、その後、国際ワークショップ・公開講演会企画が新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のため2020～2021年度と中止（延期）が続いたこともあり、この企画の実現には6年を要しました。この間、スカランティーノ先生は辛抱強く、

来日を楽しみに待ってくださっていました。また、偶然にも、スカランティーノ先生が編著者を務めた *Emotion Theory: The Routledge Comprehensive Guide* 全二巻が本企画直前の 2024 年 7 月 23 日に Routledge（ルートレッジ）から出版されたタイミングでの初来日となりました。

国際ワークショップと公開講演会の概略

以下、国際ワークショップと公開講演会について概略をご報告します。

国際ワークショップは 2024 年 8 月 3 日（土）午前・午後および 4 日（日）午前の計 1 日半、お茶の水女子大学本館 127 室で開催されました。講師のスカランティーノ先生を囲んだ参加者は 29 名（国際研究交流委員会の委員とアルバイトスタッフを含む）でした。

感情はその概念や定義をめぐって古来様々な理論的立場があり、いまだ統一の見解はありませんが、発達心理学においても感情研究の重要性はますます高まっています。しかしながら、スカランティーノ先生の国際ワークショップの要旨 (https://jsdp.jp/ws/workshop_2024/ に掲載のチラシから閲覧可能) によれば、感情 (emotions) の発達研究の多くは感情それ自体の本質 (nature) が何かということに関しては不可知論 (agnosticism) の立場を取っており、そのことが、発達するとされている感情とは何かについて明確な考えのないままに感情の発達を説明しようとするパラドックスを生んでいます。このパラドックスは、哲学や感情科学 (affective sciences) において感情 (emotions) とは何かに関して大きな見解の相違があり続けていることに鑑みるとささいな問題ではなく、感情の本質に関する不可知論は、発達心理学者の選択肢 (option) とは実際にはならないとスカランティーノ先生は指摘されています。そこで、本ワークショップでは、感情の定義には主にどのような選択肢があるのか、また、感情の概念化が異なると、感情発達研究はリサーチクエスションとそれに応答する実証的方法の双方の観点でどのように影響を受けるのかを検討することを目的としました。ワークショップは全 6 セッションで構成されました。

ワークショップ 1 日目の午前は Introduction として講師と参加者全員の自己紹介から開始し、セッション 1 “What does it mean to offer a definition of emotions? Lessons in methodology (感情の定義の提案は何を意味するか？ 方法論のレッスン)” の後にセッション 2 “Emotions as feelings: historical antecedents and modern developments (感じ・気持ちとしての感情：歴史的な前例と現代の発展)” を実施しました。午後は、セッション 3 “Emotions as evaluations: historical antecedents and modern developments (評価としての感情：歴史的な前例と現代の発展)”，セッション 4 “Emotions as motivations: historical antecedents and modern developments (動機づけとしての感情：歴史的な前例と現代の発展)”，セッション 5 “How the three dominant theories of emotions compare and contrast: basic emotion theory vs psychological constructionism vs appraisal theory (三大感情理論の比較対照：基本感情理論 対 心理学的構成主義 対 評価理論)” を実施しました。これらのセッションを通じて、感情が歴史的には主に feelings (感じ・気持ち)，evaluations (評価)，motivations (動機づけ) の 3 つのうちいずれかとして理解されてきたことを学びました。スカランティーノ先生は、それぞれの感情研究の伝統を “Feeling Tradition (感じ・気持ち伝統)” “Evaluative Tradition (Cognitive Tradition :

評価伝統または認知伝統) ”“Motivational Tradition (動機づけ伝統)” と呼んで整理し、それぞれの定義的アプローチの歴史を辿ることで、感じ・気持ち伝統は現代の心理学的構成主義に、評価伝統は現代の評価理論に、動機づけ伝統は現代の基本感情理論につながっていることを解説されました。そして、これら三大感情理論 (特に現代の理論として影響力の強い、Ekman (エクマン) の基本感情理論, Barrett (バレット) の心理学的構成主義, Scherer (シェラー) の評価理論) のそれぞれの長所と短所を整理し、スカランティーノ先生が考える改善案や提案が解説されました。スカランティーノ先生自身はこのうち、動機づけ伝統の立場であり、基本感情を自動的な反応のカスケードを導く反射的アフェクトプログラム (reflexive affect program) とみなす従来の基本感情理論の限界点を修正し、基本感情を行為傾向 (action tendencies) を導く目的的アフェクトプログラム (purposive affect program) とみなす新しい基本感情理論 (New BET) を提唱しています。この New BET が翌日の公開講演会のメインテーマともなりました。

ワークショップ2日目は、最後のセッション6 “Why it matters for developmental psychology how emotions are defined (なぜ発達心理学にとって感情がいかに定義されるのかが重要なのか)” の後に、参加者全体で Discussion and reflections (討論とまとめ) を実施しました。三大感情理論 (3つの感情研究の伝統) が感情研究者の主な選択肢としてあることを振り返った後に、スカランティーノ先生が考える感情発達で変化する能力 (abilities) の概観や、三大感情理論それぞれの立場に立ったときに感情と感情発達の見方がいかに変わるのかについての解説がありました。最後はスカランティーノ先生が編著者を務め出版されたばかりの *Emotion Theory* の Linda A. Camras (リンダ・カムラス) の執筆章に掲載されている複数の感情発達理論の収束点と相違点をまとめた Table も参照しながら、感情発達を考える際の感情理論や感情発達理論の重要性について参加者皆で議論しました。

発達を研究する際に、研究者は自身がどの発達理論の視座から考究するのか、そのスタンスを明確にすることが多少なりとも求められます。スカランティーノ先生の国際ワークショップは、感情発達の研究も不可知論を放棄して、感情それ自体の本質や自身が拠って立つ感情理論あるいは感情発達理論を明確にし、「感情とは何か」「感情発達とは何か」を研究の過程で批判的に考え続けることの重要性を気づかせてくださったように思います。スカランティーノ先生ご自身は、動機づけ伝統の感情理論の立場から、従来の基本感情理論を批判し、新しい基本感情理論を提唱されています。しかしながら、ワークショップでは自身の理論だけを取り上げるようなことはなく、三大感情理論についてバランスよく取り上げ、それぞれの長所や短所を精緻に解説されていたことが非常に印象的でした。自身の理論的スタンスを明確にしながらも、他の理論や研究者について、批判すべきことは批判しつつ、尊重することの重要性も学ばせていただいた気がします。ワークショップの途中、日本の感情理論として故・戸田正直先生のアージ理論や戸田先生の active, passive なコーピング方略についての考察を、動機づけ伝統の感情理論と絡めて可能な限り取り上げてくださったことは、(スカランティーノ先生の感情理論や動機づけ伝統との共通点が気になったため、ワークショップ直前の時期に要望していたことではありますが) 日本の感情理論と国際的な感情理論をつなぐ重要な出来事だったようにも思います。参加者の皆様にも円滑な運営や活発な交流に大いにご協力いただきました。スカランティーノ

先生が非常に温かく寛容なお人柄であったこともあり、休憩時間にもスカランティーノ先生を囲んで皆で和やかに談笑する様子が窺えました。

公開講演会は国際ワークショップ 2 日目終了後の午後に、お茶の水女子大学本館 306 室で開催されました。参加者は 94 名（国際研究交流委員会の委員と通訳者、アルバイトスタッフを含む）でした。公開講演会では、ワークショップで展開された議論を踏まえつつ、スカランティーノ先生が提唱されている、新しい基本感情理論（New BET）に基づいた感情発達の見方について講演していただきました。最後に、会場の参加者との質疑応答が行われました。本報告では、以降、本講演会の詳細をまとめております。

2024 年度はコロナ禍も落ち着き、多くの国内学会も対面開催形式に戻っていたため、スカランティーノ先生を安心して日本にお迎えすることができました。昨年度に引き続き、今年度も国際ワークショップを 1 日半とし、公開講演会と合わせて計 2 日間の日程としましたが、両日ともに真夏の晴天の下、全国各地から多くの参加者が集まり時間の許す限り国際研究交流に参加していただきました。両日のディスカッションや質疑応答の時間には、講師と参加者の間で哲学的にも心理学的にも深い議論が展開され、学術的な側面だけでなく実践的な側面からも多くの質問があり、活発な議論がなされました。

なお、本企画と同じ武藤・白井・石井・中村の 4 名を企画者として、翌日の 8 月 5 日（月）には、日本感情心理学会でもスカランティーノ先生を招いた学術セミナーを、お茶の水女子大学本館 306 室と Zoom のハイブリッド形式で開催しました。第 1 部ではスカランティーノ先生の招待講演 “How to Do Things with Emotional Expressions: From Emotional Signals to Language（感情表出で物事を行う方法——感情のシグナルから言語へ——）” を、第 2 部ではスカランティーノ先生にも討論に加わっていただき、国際シンポジウム “What Are *Kanjo* and *Jodo*?: Scarantino's Motivational Theory of Emotions Meets Japanese Emotion Researchers（感情と情動とは何か？——Scarantino 教授の「感情の動機づけ理論」と日本の感情研究者の出会い——）” を実施しました。つまりスカランティーノ先生には真夏の連続した 3 日間で 1 日半の国際ワークショップと 2 つの講演へのご登壇、国際シンポジウム参加という非常にタフなスケジュールをこなしていただいたのですが、長い間の念願であった来日が叶ったことを喜ばれ、参加者の皆様とも充実した時間を過ごすことができたとおっしゃってくださいました。

講師のスカランティーノ先生をはじめ、国際ワークショップ・公開講演会の参加者の皆様、公開講演会で素晴らしい通訳をしてくださった岡田志保先生に心より御礼申し上げます。また、共催機関として助成金支援を賜りました公益財団法人発達科学研究教育センター（CODER）と、同じく共催機関として研究補助（grant-in-aid）を賜りましたお茶の水女子大学人間発達教育科学研究所（IEHD）にも厚く御礼申し上げます。IEHD 事務局の皆様や関係する各部署のお茶の水女子大学の職員の皆様には開催準備にあたって様々なご協力をいただき、感謝申し上げます。最後になりましたが、日本発達心理学会の事務局の皆様や関係する先生方、国際研究交流委員会の委員の先生方、当日の運営をお手伝いくださったお茶の水女子大学のアルバイトスタッフの皆様にも深く御礼申し上げます。本当に

ありがとうございました。

公開講演会：

「感情発達と新しい基本感情理論 (Emotional Development and the New Basic Emotion Theory)」

講演日：2024年8月4日（日）13:30～16:45

講演者：アンドレア・スカランティーノ（Andrea Scarantino）（ジョージア州立大学）

司会者：近藤 龍彰（富山大学）

通訳者：岡田 志保

【概要】

公開講演会では、松本博雄国際研究交流委員会委員長からの開会挨拶と講師紹介の後、アンドレア・スカランティーノ先生から、感情発達と新しい基本感情理論（New Basic Emotion Theory: New BET）についてご講演いただきました。その後、会場の参加者との質疑応答が行われました。以下、スカランティーノ先生から頂いた公開講演会の要旨に基づいて講演の概要を論じます。なお、要旨は日本発達心理学会のホームページに掲載のチラシからご覧いただけます（https://jsdp.jp/ws/workshop_2024/）。

本講演の目的は、スカランティーノ先生が近年提唱している新しい基本感情理論（New BET）に基づいた感情発達の見方を主張することにあります。New BETの中核的な提案は、感情(emotions)は、根底にある上位メカニズム(underlying super-ordinate mechanisms)が駆動する構成要素(components)のクラスターを、高度に文脈依存적でありながらも目標志向的な方法で調整する(coordinating)ことで、繰り返し生じてきた進化的・文化的問題に一般化した解決策を提供するために選択された、オープンな行動プログラム(open behavioral programs)であるというものです。伝統的な基本感情理論とは異なり、New BETはアフェクトプログラム(affect programs)を高度に柔軟なものであり、ステレオタイプの固定された反応パターンでは特徴づけられないものとみなしています。このようなNew BETは必然的に、感情発達の新しい見方を提示することになり、感情発達は2つの主要な能力(abilities)が時間をかけて洗練されるものとして理解されます。1つ目は、増大する多くの進化的・文化的な挑戦に対処する能力、2つ目は、感情に対する互換性・適合性制御(compatibility regulation: 目標(goals)間の整合性のモニタリング)と実行制御(executive regulation: 手段的に適切な目標追求のエンジニアリング)をさらに洗練された形になるよう練習(exercises)する能力です。スカランティーノ先生は、このアプローチを感情の発達心理学における他の共通するアプローチに結び付けて結論づけました。

【講演記録】

講演は、感情理論の研究伝統の概説から始まりました。スライドに沿ってエクマンが提唱してきた古い基本感情理論が紹介された後、その問題点について共有がなされました。そしてその問題点に対する解決策として、スカランティーノ先生が提唱する新しい基本感情理論についての概説がなされ、感情発達との関わりについて述べられました。なお、講演会当日、参加者にはスライドの英語版と日本語版が配布されました。日本語版スライドは、講師受け入れ担当委員の白井・石井・武藤・中村の4名がスカランティーノ先生の英語版スライドを翻訳して作成しました。本報告末尾に両スライドを掲載いたします。なお、わかりやすさのため、各スライドの見出し部分の右上にスライド番号を追加しています。

以降は、公開講演会の講演内容の逐語録（岡田志保先生による通訳）を講師受け入れ担当委員の白井・武藤が文字起こしし、必要な部分は編集・修正し、まとめ直した原稿を、武藤・白井・石井・中村の4名を中心に国際研究交流委員会で最終確認したものです。講演と直接関係のない部分等は適宜割愛しています。「本日の目的」以降の各見出しは、日本語版スライドの各見出しに対応しています。

【スカランティーノ先生の講演（岡田先生による通訳）】

皆さん、今日はお越しくださり、本当にありがとうございます。今ご紹介いただきましたが、私は日本に今回初めて来日いたしました。そして、すでにもう日本が大好きです。日本は素晴らしい国、とても良いなという風に感じています。今日、私のこの理論を皆さんにご紹介できることをとても楽しみにしております。

本日の目的

本日の目的ですけれども、私が提唱している理論についてお話いたします。これは聞いたことがある方もいらっしゃると思いますが、伝統的な基本感情理論と呼ばれるものを基にしたものです。この理論は、著名な研究者としてはエクマンやイザードがいます。

今日お話しする基本感情理論について、私が提唱させていただく理論は、様々な理論、これまでの理論に基づいて形作られてきました。1つはエクマンが提唱している基本感情理論であったり、あるいはフライダによって提唱されている行為傾向であったり、あるいはキャンボスが提唱する発達心理学における機能主義理論であったり、あるいは哲学における動機づけ理論などが含まれます。こういった理論に基づいて、今日私がお話しする新しい感情理論、基本感情理論というものができています。

今日皆さんにお伝えしたいことのメインのパートですけれども、基本感情理論というのは特に近年広く批判されてきたという経緯がありますが、それであっても、感情を理解すること、あるいは感情の発達を理解する上でこの理論というのは非常に貢献が多いだろうとする、そのポイントについて今日は皆さんにお話をしたいと思います。

今日皆さんにご紹介するこの新しい基本感情理論でお伝えしたいメインの部分というのは、私たちが、感情がいかに発達してきたかということを理解する、特に自然淘汰の過程でこの感情がいかに機

能してきたかということ、そして私たちが生存していくにあたり、有利に生存していくにあたり、特別な問題解決の解決法であったということを皆さんにはお伝えしたいと考えております。

素朴心理学から感情理論へ

まずは常識的な、コモンセンスのところからお話をしたいと思います。感情というのは主に愛や憎悪や怒り、恐れ、驚き、罪悪感、恥、喜び、悲しみ、痛み、希望などのものが含まれますが、感情理論においては、これらの感情が何なのか、そしてこれらに共通するものがあるとしたらそれは何か、そしてその感情を区別するものは何か、例えば怒りと恐れの違いなど、そして感情でないものからこの感情を区別するというのを、この感情理論では提供しなければなりません。

感情というのは、様々な構成要素を含んでいるとされています。例えば認知的、表出的、生理的、現象的、行動的要素というものが挙げられます。感情理論の仕事の1つ、問わなくてはいけないところのもう1つは、こういったそれぞれの要素がどのようにして、そしてなぜ共起しているのか、同時に発生しているのか、ということと、どのように協働しているのか、そしてこのように同時発生で起こっているこれらの構成要素がいかにして働いているのかということを私たちは理解する必要があります。

感情に関する3つの研究伝統

感情に関しては何百もの理論が今までもできています。それらのたくさんある感情の理論は主に3つのテーマに分けることができると思います。私はこの3つの分類を3つの研究伝統という風に呼んでおります。

1つ目の研究伝統というのは、感じ・気持ちに関する伝統です。これは感情を本質的に、独自の種類の感じあるいは気持ちとする立場です。この考え方は古代のギリシャ・ローマでは非常に人気がありましたが中世には低迷し、そして17世紀に再びデカルトとロックによって高まり、そしてその後1884年に著名なジェームズやランゲによって正当化されたという背景があります。

2つ目の研究伝統というのは、認知の伝統です。あるいは評価的な伝統と呼んでいますが、これは感情を本質的に独自の種類の評価とする立場です。これも古代ギリシャ・ローマでは人気であり、その後19世紀の心理学者ブレンターノによって再び台頭し、そしてその後は認知主義革命とともに支配的となりました。

3つ目の研究伝統というのは、動機づけ伝統です。これは私が個人的にこの立場をとっている研究伝統でもあります。感情を本質的に独自の種類の行動を動機づけるもの、あるいは行動を制御するものとする立場です。これはアリストテレスによって予見され、そして中世には有名なトマス・アクィナスが現れ、そして人気を博し、17世紀には哲学者のスピノザ、ホッブス、マルブランシュといった主要な支持者が現れ、そして現在でも脚光を浴びています。

1884 年のジェームズの説明

今日はこういったすべての理論をお話しする時間は残念ながらありませんので、まずは皆さんにおそらく最もなじみのある、一番感情に関して有名な理論からお話をしたいと思います。それは 1884 年に発表されたジェームズ・ランゲ理論です。

どのように説明されているかという、まず刺激が起こります、これは例えば皆さんが富士山を歩いていると、森の中で熊に遭遇したとします。そうすると、本能と呼ばれるものが活性化します。この本能については、ジェームズの定義によると、必然的に特定の精神的・身体的反応を引き起こすとされています。

このように森の中、富士山の中で熊に遭遇して、本能が活性化されると何が起こるかという、身体が瞬時に反応します。その反応というのは、例えば生理学的変化、心拍が上がったり、あるいは脳の運動野や感覚野などが活性化したり、あるいは泣くという表出が現れたり、震えるということが見られたり、そういった反応が出ます。基本的には熊から離れようとする反応が、即時に自動的に起こります。

感情はジェームズによってどのように定義されているかという、このように本能によって引き起こされる身体的変化によるものとされています。つまり、身体的変化があって初めて感情が感じられるとされています。

指紋科学の誕生

では、なぜこの理論が大切なのかということを皆さんには説明をしていきたいと思います。それには主に 3 つのポイントがあります。1 つ目は、ある文献の引用から始めたいと思います (James, 1890, Ch.25, p. 450; 引用文章は本報告末尾スライド No.11,12 を参照)。この引用部分で、つまりジェームズが何を唱えようとしているかという、感情というのは指紋のように特異的な特徴を持っているものだ、それが身体や脳に現れるという風にされています。こういった特徴がみられるのは実証的に可能であるという風にされています。

このジェームズの理論からはどんなことが読み取れるか、その重要なメッセージを見ていくと、主に 3 つあるとされています。1 つ目は、感情の指標の変化というのは、本能の活性化から反射的に続くというものです。これは、先ほど熊が現れたとき、その刺激を例にお話をしましたが、そのときに反射的に様々な変化が自動的に起こるというものです。膝を打つと膝が自動的に屈曲しますよね。それと同じような反射反応として、生じるとされています。

そして 2 つ目の特徴、2 つ目の重要なメッセージというのは、感情には、独特の身体的指紋と呼ばれるようなはっきりとした特徴があるかもしれないというものです。これは、例えば脳で計測可能な形で、例えば様々な特徴が私たちは見出すことができるだろうとするものです。

3 つ目の重要なメッセージというのは、感情とは、感じ・気持ちであり、感情の表出に対しての因果関係を持たないということです。では、何が因果関係を持っているかという、本能です。本能が、行動に影響を及ぼし、変化を及ぼすということです。

指紋から基本感情へ

こういった考えが、基本感情理論には含まれています。少なくともこの40年においては、今お話ししたジェームズであったり、あるいはトムキンス、イザードといった様々な理論提唱者の内容というのが非常に影響を及ぼしています。このスライド(No.13,14)には、ジェームズとダーウィンにまでさかのぼり、そしてほかの様々な類似がある理論提唱者の名前がここには書かれています。

これらの理論の重要な革新

こういった基本感情理論の重要な革新についてお話をします。感情というのは、いくつかの進化的適応として理解をすることが重要です。こういった進化的な観点なしに、感情について話すことは難しいとされています。つまり、感情とは適応とされています。適応とは何かというと、その与えられた環境において、変異の特定集合の中で最も高い適応度をもたらしている、これを表現型変異と呼んでおりますが、つまり感情とはそういった適応だ、適応した結果現れているものだという風にされています。

ここが、基本感情理論と先ほどのジェームズの理論が会うところでもあります。思い出してみると、ジェームズの理論では、感情というのは本能によって起こる自動的な身体の変化の感じ・気持ちからできているというものでした。そして、この感情というのは、自動的に起こる反応のセットのプログラムであるということが言えます。

エクマンの神経文化理論

エクマンは、神経文化理論を提唱しています。これは、感情の役割を見るときには、生物的要素と文化的要素、どちらもが重要だとされる理論です。先ほどのジェームズの理論と比べながらぜひこれを見ていただきたいと思います。先ほど原因と結果についてジェームズは説いていましたが、本能という概念がありましたね。このエクマンの神経文化理論をみると、刺激というものが、先ほどの例だと富士山で熊に遭うという刺激が与えられたときに、ジェームズの理論では、自動的に反射的に起こる本能というものがありましたが、このエクマンの理論では、その代わりに基本感情というものが出ています。これは、進化したアフェクトプログラムと呼ばれる6つの大きなプログラムで、怒り、恐怖、驚き、喜び、悲しみ、嫌悪といったものが含まれます。これによって活性化される身体の変化というものがあります。これは私たちが選択あるいは気づくことなしに起こる変化です。この枠組みや構造自体は、先ほどのジェームズの構造に非常に似ていますが、本能の代わりにこの基本感情というものが登場しています。

この基本感情、つまり進化したアフェクトプログラムというのは、すべての人間に共通したものとされています。つまり日本人であれ、イタリア人であれ、アメリカ人であれ、同じプログラムを持っているということを意味します。しかし、何が違うかというと、私たちは違う文化の中で生活しています。その文化が違うために、こういった現れている変化と関連づけの内容が異なります。例えば、

文化においては表示規則というものがあります。これは、例えば日本では、目上の人に怒りを示すということが望ましくないとされています。ですが、アメリカではそういった文化というのはありませんので、例えば上司にも怒りを表出するというのがオーケーとされているかもしれません。しかし、日本ではそうではありません。ですので、この学習された要素というのが加わっています。

このように、生物学的要素と文化的要素がどちらも重要な役割を果たしているというものになります。この理論は非常にシンプルなものになっていて、40 年間もの間、非常に人気を博していた理論ではありますが、現在になっては、非常に批判が集まっています。

古い基本感情理論と発達

それについて、これから私はまずは感情が子どもや幼児においていかに発達を遂げるのかということと、そしてこういった批判を受けてこの理論はどのように修正していく必要があるのかということこれからお話ししていきたいと思います。

イザードというのが基本感情理論の非常に重要な理論を提唱した人の 1 人ですけれども、彼は非常に洗練された理論を発表しました。その理論の中では、幼児における感情の発達を説いています。その発達において、感情には 2 つのタイプがあるとされています。1 つは基本感情とされるもの、それは、興味、喜び、悲しみ、怒り、嫌悪、恐怖といったものです。そしてもう 1 つは、感情スキーマと呼ばれるものです。これは、基本感情は進化の結果として、生得的に備わったものであるというものに対して、この基本感情が知覚および認知のプロセスと相互作用して、影響を与えているとされるものです。

その理論においては、発達のスケジュールというものが提唱されています。これは定型発達の子どもにどのタイミングでこういった基本感情が芽生え始めるのかということ説いたものです。基本感情理論においては、生まれたときから、興味、喜び、嫌悪のような基本感情は存在しているとされています。そしてその後、生後 3 ヶ月ぐらいで怒りや悲しみのプログラムが利用可能になるとされています。そして恐怖というのは、生後 6 ヶ月から 7 ヶ月で現れるとされています。

そしてそのほかの罪悪感や恥のようなすべての感情は、基本感情とは位置づけられていません。これは感情スキーマとされていて、先ほどの 6 つの基本感情が発達されたものとされています。これは、社会的・認知的行動も関わるようになって、基本感情とはかなり遅れを取って、生後 18 ヶ月ほどから発達されるとされています。しかし、イザードはこの正確な、いつ、何ヶ月ぐらいで、こういった感情スキーマが発達するかということに関しては、全く言及していませんでした。

大切な要素としては、先ほどのジェームズが説いたプログラムでは、本能が自動的に発動するということが言われていましたが、イザードは、少なくとも当初は、反射的に生み出される顔の変化が子どもにもみられるということを最初の段階では説いていました。この見解については、のちにイザードは変えるということをしてしていますが、当時は顔を見ると幼児がどのような感情を持っているのかということがわかるという風にされていました。

もしこの中に発達心理学をご専門にされている方がいたら、この考えというのは非常に扱いやすい

ものだという風に感じるかもしれません。つまり、子どもの表情を見ると、子どもがどんな感情をしているのかわかるということは、こちらは顔を、表情を見るということさえすればいいということになりますよね。

これまでの話を要約させていただくと、6つの基本感情のセットというのは、いくつかは、生まれたときから存在して、そしてその後1年半の成長過程においては、ほとんどの基本的な感情とされる感情は子どもが発達で身に付けるといふ風にされています。そしてその後も感情のスキーマのセットというのは学習と認知のプロセスを通じて発達をしていくとされています。このようにして子どもの豊かな感情反応というのがどんどんとレパートリーとして増えていくというものです。

この理論というのが、ここ10年、15年で弱体化していった理由についてここからみていきたいと思います。特に近年批判を受けてきたその背景にあるのは、実証的な要素が欠けているという点と、それから私もこの批判者の一人ではありますが、この概念に関して一貫性がないという点、その2つが挙げられます。

古い基本感情理論は実証的に欠点がある

どんな実証的な欠陥があるかということを見ていきます。基本感情理論は、例えば恐怖が起こると、表情にそれが現れ、そして心拍に影響を及ぼし、そして脳内では扁桃体の変化が及び、そして闘争-逃走反応のような反応が起こるといふ風にされています。

ですが、この何十年もの研究の結果、この理論というのは正しくないということがわかっています。つまり、この恐怖に基づいて、こういった表情であったり、心拍の上昇、脳内の変化、闘争-逃走反応は必ずしもそのまま、セットとして起こるわけではないということが今はわかっています。つまり、言い換えると、恐怖、怒り、嫌悪などが生じたときに、常に必ず生み出される、そして唯一の例えば非言語のシグナルであったり、脳内の変化であったりとか、神経系の変化、そして行動の変化というのは存在しないといふ風にされています。つまり、ジェームズがもともと示したように、こういった感情などが持つ独特の身体的あるいは精神的な変化というものとは決まったものがあるわけではないということです。

2つ目の批判の要因にあるのは概念的に一貫性がないという点です。これは先ほどのような、恐怖が起きたときに、いつも心拍が上がるとか、特定の反応がいつもいつも起こるといふ風なことを仮定した場合に、すべての脅威に対して、あてはまる良い対応方法というのが、1つ挙げられるといふ風に仮定できますが、実際にはそういったことは無いわけですね。あらゆる脅威が存在していて、そして良い反応とされるものには様々な内容があるわけです。つまり、その脅威の内容に合わせた、よりよい反応というものが必要になります。それによって私たちは進化をしてきました。

これらの欠点について何をすべきか？

今、この基本感情理論に関しての実証的そして概念的な欠点についてお話をしましたが、ではこの欠点に対して私たちは何をすべきでしょうか。1つの選択肢としては、基本感情理論を完全に諦

めるというものです。これはちょうど心理学的構成主義者が推奨しているようなスタンスです。2 つ目の選択肢としては、基本感情理論の修正を試みることです。例えば、基本感情理論が前提としている、感情は適応であるという前提は残したまま、それ以外の前提についての修正を加えていくというものです。

私は修正のために2つの提案をしたいと思います。1つ目は感情理論に関する機能主義の考えです。2つ目は新しい基本感情理論と呼ばれるもの、これが私が提唱しているものになります。

代替案としての機能主義？

では、今日は時間の関係で、こう通訳が入るので、本来ですと心理学的構成主義者がどのような批判をしているのかということをお伝えしようと思っていましたけれども、その部分は今日は割愛させていただいて、修正のための2つの提案、つまり機能主義とそれから新しい基本感情理論について、焦点を当ててお話をさせていただきたいと思います。もし、ご興味がある方は心理学的構成主義者に関して書いた文献もありますので、そちらをご紹介させていただきたいと思います。最初にお話ししたいのは、この機能主義の考え方です。

機能主義に関してですけれども、これは非常に影響力のある主義ではありますが、冒頭にお話ししたエクマンの理論、つまり感情というのは進化的適応であるというその部分を、割愛してしまっているというところが、私に変更を加えたい点です。つまり今日の感情というのは、私たちの淘汰の歴史によって影響を受けて、そして重要なものであるという、エクマンの非常に大切な洞察を、このままどううまく活用できていないということです。

そこで、古い基本感情理論において大切な要素と、機能主義の長所を、いくつかを統合した形でより優れた理論を提唱しようとするのが私の試みです。これを新しい基本感情理論と呼んでいます。

具体的にどのような考えかという、機能主義的な考えによれば、感情は、ということで、引用されている内容を読み上げます。感情とは、個人的に重要なものとして評価されるものと個人との関係に影響する行為傾向によって、「生物と（外的もしくは内的）環境の間の重要な関係性を構築、維持、そして阻害したりする双方向のプロセス」(Barrett & Campos, 1987, p. 558; Frijda, 1986)である、とされています。

機能主義と古い基本感情理論の差異

では、この機能主義が、先ほどまでお話ししていたエクマンの提唱している基本感情理論とどのように違うのかということをお話ししていきたいと思います。いくつかありますが、1つ重要なものとしては、もともとは感情とは自動的な反応という風に捉えられていたものが、そうではなく行為傾向を生み出すようなもので、それは感情に特異的なものではないとされる点が、大きな違いになります。

具体的には、恐怖というのは、恐怖に特異的な一連の反応があるわけではなく、潜在的な存在を避ける傾向であるとされるものです。これは先ほどまでお話をしていたエクマンの古い基本感情理論

が、強く非難されていた点、つまり決まった身体や脳の変化があるわけではないという批判を回避するような内容になっております。

2つ目の点としては、イザードの理論によると基本感情とそれとまた別に感情のスキーマが区別されていましたが、機能主義においては、それらを区別しないというものです。つまり、感情というのは、基本感情がより洗練されて感情的スキーマが生まれるわけではなく、すべて感情というのは役割を持っているという考えになります。

3つ目の点というのは、もともと顔の表情というのは、基本感情理論では自動的に表れるとされていましたが、機能主義においてはそうではなく、シグナルを送るその送り側に有利なように、それを受け取る観察者に影響を、行動的に影響を与える目的があるという風にされています。つまり、顔の表情というのは自動的な読み出しではなくて、シグナルを送る側に有利なようにそれを受け取る人の行動に影響を与えるものだとするものです。

そして4つ目、これが非常に大切なポイントになりますが、この刺激がいかに重要かという、その重要性の評価というのは、社会的影響をかなり強く受けるとされるものです。つまり、自分の個人的な見解というのが感情に影響を及ぼすのではなくて、この世界のあらゆるほかの要素が影響をして、私たちがその感情を評価する、ということになっていると、あらゆるものの影響を受けて私たちは感情を評価しているというものです。

社会的参照

この社会的影響を受けて、私たちが評価をしているというその具体的な代表例としては、社会的参照が挙げられます。社会的参照においては、ある人、この場合はこの写真に映っている赤ちゃんになりますが、曖昧な出来事について、理解をするために感情的情報を得ようとするプロセスだとされています。

この事象を素晴らしく表した実験というものがあります。つまり、この1歳児、幼少期に刺激に対してどのように対応するのかということを表した実験になります。この場合には、親を使って子どもがいかに評価を下すかということが表されています。

この実験では、1歳児がアクリル板を張ったその下に落差があるような視覚的な断崖を作って、その手前の位置に子どもを配置します。そしてその反対側にいる母親というのが、様々な反応をするという実験です。その母親とは反対側に置かれた子どもはその状況において、顔を上げて母親を見るわけです。そのときに母親の表情が笑顔の場合、そして、あるいは恐怖をしている表情のときに、幼児はどのような行動を判断して取るのかということがこの実験ではみられました。

実験の結果は非常に素晴らしいものです。結果的にお母さんが笑顔のときには、その対岸にいる子どもは、その笑顔を見て19人中14人の子どもがその断崖を渡るということをしました。ですが、対岸にいるお母さんが恐怖の表情をしているときには、14人中、誰もその断崖を渡るということはありませんでした。

これは非常に素晴らしいポイントが含まれています。つまり、この顔の表情というのは、自動的な

読み取りの機能ではなくて、実際にツールとして、つまりこの場合、母親が意図してその子どもの行動に影響を与えるものとして機能しているという点です。表情が使われているわけです。

表情に関する理論については、私が明日、講義をする予定になっております。明日の 13 時 30 分から皆さん、あるそうですので、ぜひご興味があればご参加ください。

発達についての機能主義的見解

今、表情についてお話ししてきましたが、もしこの表情を通したコミュニケーションというのが戦略的な意図があるとしたら、感情はその関係的な過程、プロセスである、つまり反射的な反応の連鎖ではないとしたら、この言語習得前の子どもが特定の感情を持っているかどうかの測定というのは、単に表情の動きを確認することだけでは十分ではないということがわかります。

単に顔の表情をチェックするだけではなくて、行為傾向を確認する必要があります。この行為傾向というのは、単に表情を見るのに比べて、かなり細かな観察というものがようになります。どのような観察が必要になるかという例をお話ししていきたいと思います。例えば、その子どもが母親にどれくらい近接性を求めているか、という行為傾向を見たいという場面があるとしたら。

例えば、この子どもがどれだけ母親に近接性を求めているかという、その行為傾向を測るためには、物理的にどれくらい距離があるかを測るのではなくて、例えば、子どもが抱き上げてもらおうと腕を上げているかどうかを観察したり、あるいは子どもが苦痛を感じたときにどれだけ容易に落ち着くことができるか、あるいは養育者と再会したときに笑顔になるかを確認したりするといった必要が出てきます。

機能主義の欠点

では、機能主義の欠点は何でしょうか。この欠点があるために、私はこの新しい基本感情理論というものを提唱しています。

この機能主義の重要な誤りの 1 つというのは、この関係性の再編を生存上の価値というもののから切り離しているということです。つまり、進化的な過去がいかに現在に影響を及ぼしているかということを見逃してしまっているということです。この生存上の価値というのは、長年の知恵であり、生存上進化してきたうえで非常に重要なものとなっています。

3 つ目のポイントには、ある引用を載せていますが、こういった引用が、私がこの機能主義には同意できない点になっています。これを読み上げると、「感情理論における機能主義は、進化論的な生存価値ではなく、感情と行おうとしていることとのつながりに関心を寄せる…機能主義的視点からの簡潔な感情の定義は、自分にとって重要な事柄に関する環境との関係を構築・維持・変化・終結させようとする試みである」(J. Campos, R. Campos, & Barrett, 1989) とされています。これは、つまり関係性の再編に焦点を当てているわけですが、この関係性の再編があるのは生存上の価値があったため、つまり進化上、進化的な要因が無視できない、(進化的な要因が) があるために、この関係性の再編というものがあるというのが私の見解です。

つまり、感情というのは繰り返し生じる問題への対処を助けた、という過去の成功例に照らし合わせて、選択されてきたコア・メカニズムから始まる、関係性の再構築戦略だと考えるべきという点です。

基本感情理論の核心的洞察から再スタート

では、基本感情理論の核心的な洞察から、また再スタートをしたいと思います。このエクマンの核心的洞察をもう一度振り返ってみると、基本感情というのはわれわれの進化の過程で、われわれの目標と関連する繰り返し起きる環境において、ほかの解決策よりもより良かった方向へとわれわれを駆り立てるものだとされています。この基本感情理論のアフェクトプログラムの理解に対して、エクマンの基本感情理論には2つの重要な修正を入れる必要があるというのが私の見解です。

1つ目の修正点ですけれども、これは機能主義の立場を主に含み入れているものですが、ここにある通り、感情プログラムは、反射的な反応の連鎖というよりは、むしろ行為傾向を導く必要があるというものです。

2つ目の修正点というのは、基本感情の働きというのを、自然淘汰に限定する必要はないと、私たちの文化の歴史においても、この基本感情というのは重要であった、とするものです。

ここで皆さんに投げかけたい質問というのは、私たちが生物として、あるいは文化に属する一員として、感情が解決策になり得る問題というのはどんなものだろうか、その問題というのは繰り返し生じている問題です。

解決策として感情が必要な種類の問題とはなにか？

この問題には特徴があるとしています。(1つ目は)その種の自然史または文化史において確実かつ認識が可能な形で繰り返し繰り返し生じてきたような問題です。2つ目は、様々な反応システムが複雑な方法で協調・調整されない限り、うまく切り抜けることができないような問題です。つまり私たちのあらゆるリソースを動員する必要があります。考える能力であったり、行動する能力であったり、感じる能力、あらゆるものを協働して使う必要があります。3つ目のポイントとしては、1つの反応がすべての問題を解決するわけではないという点です。そして4つ目のポイント、最後のポイントがとても大切な点ですが、適切に対処できなければ、高い個人的コストが生じるというものです。このコストというのは、コミュニティから疎外されることであったりとか、死を招くようなものとされています。

基本的にすべての種が抱える6つの進化的問題というものがあります。1つは障害の原因を取り除くこと、この問題に対しての解決策というのは怒りです。そして捕食者を避けること、この問題の解決策は恐怖です。そして汚染されたものを避けるという問題に対する解決策は嫌悪、目標へ前進するという問題の解決策は喜び、目標追求をやめることへの問題（の解決策）は悲しみです。

こういった基本的問題と私はこの問題と呼んでいます、この繰り返し起こるような問題というのは、生物的問題、つまり進化における問題だけでなく、文化的問題も含んでいるはずです。ですので、

エクマンのこの鋭い洞察、つまり感情というのは解決策であるということをもう少し広げて考えていきたいと思います。

新しい感情への基本感情理論の拡大

ここから私が特に提唱したい内容になっています。私たちは社会的な生き物として問題を抱えています。そして感情というのがその解決策となり得るというものです。例えば加害によって傷ついた親密な関係性を修復するという問題があるとしします。それに対しての解決策は罪悪感です。あるいは同種個体との間で、ポジティブで対立がない、コミュニティを構築する相互作用を育むという問題に対しての解決策は楽しみです。あるいは、非親族間での協力を促進し、相互に恩恵をもたらすような関係を築くという問題に対しての解決策はコンパッション、思いやり、共感です。そして本質的に価値がなく、集団アイデンティティを脅かすものと評価する対象からの社会的距離を取ること、それを促進することという問題の解決策は軽蔑です。そして、非親族間のお互いに恩恵のあるような形で集団的団結力を強化するという問題に対しての解決策は感謝です。そして、周りの人をなだめることによって、社会的誤りのコストを軽減するという問題への解決策は困惑です。

新しい基本感情理論による基本感情とは何か？

では、新しい基本感情理論において、基本*感情 (basic* emotions) とはどのように定義されているかということ、これは行動プログラムとされています。つまり優先された行為傾向を生み出すような行動プログラムであるということ、そして進化的または文化的に基本的な目標を追求するためのものであるということ、そして専用のトリガーとなるインプットシステムを持っていて、実行制御の対象であるということです。これを理解するために大切なもののひとつが、二重制御構造というものです。つまり、感情的な行動というのは、優先された行為傾向と、その状況に応じてその傾向を柔軟に表す、あるいは制御するような実行能力の作用から生じるということです。

(休憩)

新しい基本感情理論と発達

皆さん、戻ってきてくださってありがとうございます。いい知らせは、スライドはあと3枚でお願いします。これは講演が始まるまで気が付かなかったのですが、通訳を挟むと時間が倍かかるということに気が付きましたので、いくつかのスライドは割愛しながら今日は皆さんにご説明させていただいております。

これから講義の時間は10分に留めたいと思いますが、お話ししたい内容としては、この新しい基本感情理論でどんなことを示唆しているのか、特に乳幼児の感情の発達に関する理解についてお話ししたいと思います。

どんな示唆がうかがえるかというと、第1に基本感情と感情スキーマを区別をするのをやめた、

区別をしていないという点です。これまでは、これらが区別されていましたが、これらはいわゆる基本感情そして高次の感情と呼ばれるものを区別せず、同じ傘下のもとにみなすということをしていきます。どんな傘下かという、私が基本的問題と呼んでいるものに対する解決策の1つとしてみていくというものです。

第2には、この感情が基本的な問題に対する解決策であるとすれば、感情の発達というのは、本質的に新たな進化的あるいは文化的な問題を解決するための学習であるということを示しています。つまり子どもは新たな問題を解決するということを学習していく必要があるということです。

第3に、感情にとって生物学的に決められた発達スケジュールはないとする点です。これは文化的な問題というのは特にいつそれらがあらわれるかということが予測できないものになります。ですので、子どもによって、その親にもよりますし、文化にもよっていつ自分がその新しい問題に直面するのかということが決められているわけではありません。

そして第4には、この感情というのが優先された行為傾向であるという風に受け取る場合には、その感情発達というのが問題解決においては、とても必要なものという風な見方になります。つまり、子どもが自分で問題を解決するためには、その中核となるエモーショナルコンピテンスを育む必要があるというものです。これは、子どもの感情に対する外的な親の調整から、子ども自身が調整をする内的な自己調整へと変化していく必要があります。例えば、行為傾向の例としては、攻撃性というものがあります。これは場面によっては抑制される必要があります。このように、(戸田正直氏が区別して呼んでいる)受け身的なコーピングではなくて、能動的なコーピングを育てていくということが必要になります。それを、非常に素晴らしく表した引用が、ここには書かれています。なぜなら、これはニコ・フライダの引用になりますが、「なぜなら、行為傾向は、実行のためにセットされたプログラムであり、その本質としても制御の対象となる」(Frijda, 1986)というものです。これは、エモーショナルコンピテンスには衝動をコントロールする、というものも含まれていて、そういったことを、子どもは発達において獲得していく必要があるとするものです。

幼児期に時間をかけて発達する、2種類の内的調整というものが存在します。1つは互換性制御と呼ばれるもので、もう1つは実行制御と呼ばれるものです。これらの例をそれぞれお話しします。

1つ目の互換性制御はどのようなものかという、行為傾向の目標が、子どものほかの目標とも互換性があるかを監視すること、とされています。具体的な例としては、例えば子どもが園庭で遊んでいるとして、ほかの子どもからおもちゃを取られたとします。そのときに、この子どもに仕返しをするということをするのか、あるいは、ほかの目標、例えば自分が良い子でいること、あるいは親から褒められるという、ほかの目標と両立、その目標が両立するのか、ということを見ることになります。

この互換性制御というのを子どもは学んでいく必要があります。この例において仕返しと言いましたが、おもちゃを取り返すという表現のほうが適切かと思いますが、2つ目の実行制御というのは、行為傾向の目標が、目の前の環境に柔軟に適用されているかを監視することとされています。先ほどの例ですと、園庭で、ほかの子どもにおもちゃを取られたときに、その取り返すという行為は、どのようにするのが一番良いのか、その直接その子どもの手から自分が取り返すのか、あるいは先生を呼

ぶのか、あるいは泣くのか。同じおもちゃを取り返すという行動であっても、そのやり方というのは色々あるはずです。

そして今日お話ししたい第5のポイントとしては、言語能力を、発達において身に付けていくわけですが、二次的フィーリングを感じる、二次的な感じ、フィーリングに対する意識ですね、を感じる能力においては、時間をかけて発達する、ほかの中核的コンピテンスは、概念獲得が必要であるという点です。例えばその言語能力を獲得して、そして他者の感情を例えば言葉にするということとは、言語能力以外にも、そういった概念獲得というのが必要になります。

そして第6のポイントとしては、文化の影響です。例えば、アメリカのような個人主義文化と、日本のような集団主義文化を比べたときに、その発達の経路というのはおそらく違いが示されるでしょう。この文化差を示す例はたくさんあると思いますが、きっとそのうちの1つがここには書かれています。例えば日本のような集団主義的な文化においては、アメリカのような個人主義的な文化よりも、恥、というものが奨励されているかもしれません。と言うのも、集団主義の文化においては、その恥の感覚というのが、個人主義的な感覚というよりかは、むしろ集団的な、集団主義的な感覚に基づいていると考えられるためです。つまり、公然の前で何か間違えるということは、個人的な主観だけではなくて、他者とのその全体の集団としての関わりにも、非常に密接に結びついているということです。これを言い換えると、公的で相互依存的であるとも言えますが、つまり人のことをより気にしている集団主義的な文化においては、恥というのが、より望ましい反応であるとされる可能性があります。その違いによって、例えばアメリカの個人主義的な、アメリカに住む親の反応と、それから日本のような集団主義的な文化に住む親では、子どもが恥を持ったときの反応も違うでしょう。つまり日本においては恥がより強調され、そしてアメリカではその逆の反応が起きるとされるものです。

結論

では、本日の講義の結論をお話いたします。このエクマンの基本感情理論の説くように、私たちの反応、感情というのは、反射的に起こるものあるいは、私たちのDNAに組み込まれていたもの、ではなく、私は、動機づけの構造として、この基本*感情を捉えています。この動機づけの構造というのは進化および文化的な、基本的問題を解決することを目的としており、一連の連続した行動の選択、活性化、終結を、実行機能とともに調整するものです。

そして2つ目のポイントは、基本感情理論というのは、生存に基づいているという点は、引き続き重要なポイントであるとするものです。そして、その上で、2つの行動制御というものが重要視されます。1つは緊急性における行動、そしてもう1つは柔軟な行動というものです。この感情によって、こういった個々の状況に合わせて対応ができるようになるというものです。

そしてもう1つは感情発達においては、繰り返し起こる基本的問題に対する解決策となるというところが非常に重要です。特に、個々の特徴を持った状況に合わせて解決策を講じるということ、そしてその解決策を間違えると大きなコストがあるという点が挙げられます。そして、感情の発達というのは、時間をかけて新たな基本的問題を解決する方法を学ぶこととされています。これは感情の内

的調整が非常に重要なものとなります。つまり自分自身で感情調整ができるようになるということです。それにはほかの自分の目標との互換性があるかということ、そしてその目標達成のための行動をどのように実行するかということがポイントになります。この2つは古い基本感情理論の中には含まれていなかった概念になります。その古い基本感情理論においては、感情というのは自動的に起こるもの、それが表情や身体に表れるとされていましたが、この新しい基本感情理論においては、行為傾向というものが重視されています。これは私たちが、より有能な形で感情を使って、発達させて使っていく上で、新しい経路を導くとされています。

（スカランティーノ先生から英語で謝辞があり、会場からの拍手の後の通訳）今、皆さん拍手してくださいましたが、今回来日するにあたって、様々な方々の協力の下、この講義が実現しました。まずは武藤先生、そして白井先生、石井先生、中村先生に心より感謝を申し上げたいと思います。そして、通訳もありがとうございましたということを言っていました。

（スカランティーノ先生が英語で）岡田志保先生もありがとうございました。最後に、この講演会を企画し、後援して下さった多くの機関にも感謝します。日本発達心理学会（JSDP）、日本発達心理学会国際研究交流委員会、発達科学研究教育センター（CODER）、お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所（IEHD）の皆様、本当にありがとうございました。私の生涯の夢であった来日が実現し、皆様と考えを共有できたことを心より感謝いたします。（日本語で）ありがとう。

質疑応答

【司会・近藤委員】

スカランティーノ先生、ご講演ありがとうございます。通訳のほうは、岡田志保先生にご担当いただきました。改めて感謝申し上げます。

それでは、質疑応答のほうに、このまま移っていきたいと思います。日本語でも英語でも、どちらでも大丈夫になりますので、もし、ご質問、もしくはご意見ある方がおられましたら、手を挙げていただければ、マイクのほう持って行きたいと思いますので、手を挙げていただければと思います。

【質問者 1（英語での質問を岡田先生が通訳）】

発達に決まったタイムスケジュールがないとおっしゃっていたところについてもう少し教えてください。つまり、発達において、例えば認知や社会的な面も関係しているということは理解しているんですが、例えば認知に関しては、生理学的な要素も非常に結びついていると思うんですね。感情もそういった意味では、生理学的な要素に関連しているのではないかと考えられますので、例えば脳の特定の領域だったりとか、大脳新皮質（前頭前皮質）などが影響して、発達にも影響を及ぼしているのではないかと考えられるのですが、そちらを詳しく教えていただけますか。

【回答の通訳】

すごくいいポイントをありがとうございます。今日の午前中のワークショップの中でお話しさせていただいたポイントでもあるのですが、感情と認知とそれから社会的な面というのは、それぞれが密接に結びついているということが、1つまず言えます。例えば、イザードの理論を使って説明しようとする、文化的な学習というのは、例えば生理学的なプログラムの学習の後に起こるとされています。生理学的なプログラムというのは、自動的に起こるプログラムを指していますが、それと比べて文化的な学習というのは、決まったタイムスケジュールというのがないですね。つまり具体的な例を申し上げると、罪悪感というものがあるとしたら、これは、どちらかというと問題解決、それも内的なプロセスが伴うものになります。この罪悪感に直面するあるいはそういった問題解決が必要になるのか、いつその人の人生に現れるかということは決まったスケジュールがあるわけではないですね。そのタイムスケジュールという点においては、ばらつきもありますし、環境によっても違います。なので、この年齢で起きるということは言えないわけです。罪悪感がいつ現れるかというのは、親がどんな関わりをしているかにも関わりますし、古い基本感情理論が提唱

しているような、いつ生物学的に、いつ習得されるかということはこういった観点では言えないということが言えると思います。

【司会・近藤委員からの質問 1】

ほか、いかがでしょうか。……もしおられないようであれば、司会者特権でいくつか質問しても大丈夫でしょうか。

まず、ご講演ありがとうございます。私自身、感情とか感情の発達を研究している者なので、今回感情とは何かということを深く問うていくことの重要性を改めて学ばせてもらいました。一方、この公開講演会は、研究者だけではなく、教育、福祉、医療など、様々な現場で、心理的援助をされている、現場の方々も参加されております。実際の現場で、感情とは何かと問うていくというのは、なかなかややこしい問題でもあって、なかなかこう考える、直面するということは難しいかなと思うのですが、先生の、新しい、この New Basic Emotion Theory であったり、こういった感情理論に乗っかることで、現場の人たちの有意義性みたいなものが、どこにあるのかなというのを、もしアイデアがあれば教えていただければと思います。

【回答の通訳】

とても良い質問をありがとうございます。これは、あらゆる理論に言えることですが、抽象的な概念を実際の現場でどう実践していくかということを考えることは、非常に難しいことでもあります。1つ、子どもと接している皆さんがどこから始められるかということ考えたときには、行為傾向について考える、この行為傾向という視点を持つと、今まで見えなかったことが見えてくるということが起こると思います。例えば母親との愛着関係もそうですし、その行為のこういった行為傾向のエビデンス、その顕著に現われていることを見つけていくのは、初めは難しいことかもしれませんが、発達心理学において必要なことは、その基本的な動機は何なのかということを見ていくことでもあると思います。そこから始めていくことができると思います。それ以外にはたくさんの仕事が残っていると思いますが、これまで議論されてきた、反応というのはあらゆる人間にとって普遍的であるということは、もう通念ではありません。そうでなく、普遍的なものはプログラムです。そのプログラムの表れ方というのは非常に柔軟なものであるべきです。重要なことはその衝動が起きたときにその動機は何なのかと見ていくことだと思います。そこから私たちは考え始めることができるのではないのでしょうか。

【武藤委員からの補足】

ちょっと補足させていただきます。行為傾向っていう概念についてですね、耳慣れない方もいらっしゃるかなと思いますので。この行為傾向概念、最初に考えられたのは、ちゃんとしっかり理論として考えたのはニコ・フライダさんという方で、もう亡くなってしまった研究者なんですけれども、かなりエモーション研究では、重要な方ですね。彼の話を一回聞いたことがあったんですけども、そのときに、エモーションは、何かを、大事なことを評価して、“want to do something”なんだって言ったんですね。そこの“want to do something”だけすごい覚えてて、私が。それで、その何かしたくなるっていうのが、感情のすごい重要な特徴だっていうことですね。つまり、感情で、喜ぶと飛び跳ねたくなるとか、今ちょうどパリオリンピックがやってますけど、日本人選手が金メダル取ったりすると「やったあ」みたいな感じでつい飛び上がりたくなっちゃったりとかですね、実際に飛び上がらなくても、飛び上がりたくなったりとか。応援しているチームが負けちゃったりしたら、もう、ずーんと、実際にはしなくても「すごいもう、こうなりたい」っていう、そこまでの話です。

そこと、いわゆる今までエクマンとかが言ってきたところってのは、反射的に、喜びの場合はもう笑顔が出るとか、そういう表出が出るとか、要はその行為傾向と先の結果までバーンと出ちゃうっていう、今の『インサイド・ヘッド2』って、ちょうどやってて、あれはダッカー・ケルトナーとかが絡んでいて、基本感情モデル、基本感情心理学っぽいやつで、頭の中にヨロコビ、カナシミ、イカリ……の5体がいってっていう話で、それがさらに2になっていっぱい出てくるっていう話なんですけれども。あんな感じでもうプログラムとしてセットされていて、なんか必要なときにバーンと全部出るみたいに、構成要素が全部出るっていう捉え方ではなくて、彼（スカランティーノ先生）の場合には、動機づけですね、要はモチベーションです。岡田先生が訳してくださっていた「動機」っていうのは動機づけで、それが“want to do something”だって思っていただけと（よいかと思います）。

要は、現場の方たち向けに言うんですけども、私とかみ砕いてですけれども、例えば子どもが何か、怒ったりとか、泣いたりとか、しているとしたら。（中略）Happiness というのは、進化的に仮定すると、目標に前進したいなみたいなところで行為傾向というか、この辺の基本的な6つの進化的問題っていう話があったかと思うんですけども、その目標へ前進する過程で、すごい身体を飛び跳ねたりとか、にこやかにしたりとか、実際にどういう行動で表れるか、というところが今までのエクマンとかのモデルとかとは違ってい

て、かなり柔軟に決まってくるよ、そこが一番彼（スカランティーノ先生）の主張したいところなのかなっていう風に思っています。

ちなみに、New Basic Emotion, New BET とは言っているんですけども、実は彼（スカランティーノ先生）がこの理論を提唱し出したのは、ご存じの方もいらっしゃると思うのですが、2011年頃からでして、けっこう10年前ぐらいからですね、この理論を言っていて。私が好きな彼の論文のタイトルに、“Don’t give up on basic emotions”っていうタイトルがあります。これはEmotion Reviewにたぶん2011年ぐらいに載っている論文なんですけれども、その頃から彼は、エクマンの反射モデルではちょっと微妙なので、柔軟にやっていったら、ほかの理論とももしかしたらうまく整合できるんじゃないかということで、とにかく行為傾向とか行動傾向ですね、action tendency というのは、何かしら行動を達成するための、行動の準備状態で、実際の行動はどうなるかっていうのはその状況次第なんだ、だから、子どもが何かしたがっているな、っていう意図を、例えば、何だろう、ヴィゴツキー的に考えるなら、今私は適当にしゃべっていますけれども、何かしたそうだなって思うところで、親が適切な足場かけとかをしてあげたりしたら、もしかしたらその子の行為傾向がうまく具合に活かされて、っていうようなことをもしかしたら考えることができるかもしれない。認知発達のピアジェ的な考え方でいくならば、なんか挑戦したがっているなこの子、なんか積み木を頑張って積み上げているなっていうところで、サポートしてあげたりすると、その彼の行為傾向、彼女の行為傾向が満たされて、何かいい感じで発達できていくってことが（あるかもしれませんが）。彼（スカランティーノ先生）は哲学者なので、これをここまで発達心理学について、感情と彼の理論と感情発達を考えるのは初めてなんです、実は。初めてなんですけれども、ここまで整合的に、スターティングポイントだったという風に彼はおっしゃっていましたけれども、最後、彼は「ラッキーだ、あと3枚しかスライドがないぞ」って言ってたけれど、「ほんとに3枚か？」って思うぐらい、すごい濃密だったような気がするんですけども。

皆さんもすごい頭の中でもやもやしていたりとか、そういうこともあるかと思うので、ぜひ、質問を、何でもけっこうですので、どうぞよろしく願いいたします。すみません、長くしゃべりました。

【質問者2】

すみません、質問というか、ちょっとアドバイスを頂きたいなということなんですけれども。私は最近、本当に、すごく最近、発達障害がある子たちの療育の

仕事を始めたところなので、まだ本当にすごい色んなものに関してビギナーなんですけれども、心理士としてそういう発達に問題がある子たちと関わっていると、やっぱり感情の動きってというのが定型の発達の子たちとはちょっと違うなっていうことを多く感じていたもので、こういう講義を今日受けて、感情っていうものがどういう風に動いているかなっていうのを学んで、あんなか、あの子たちはもしかしたらこういう部分でつまづいてたのかなとか、ちょっと違う部分があるのかなっていう風に色んなことを思いながら聞いていました。まだちょっと色々もやや考えているところがあるので、もしよかったら、そういう療育というか、発達にちょっと偏りがある子たちと関わるときに、こういう視点が活かせるかもしれないっていうようなアドバイスがもしあったらちょっとお聞きしたいなと思いました。お願いします。

【スカランティーノ先生からの質問（英語）】

ご質問ありがとうございます。1つ確認したいのですが、あなたが関わっている子どもたちというのはどういったタイプの発達障害をお持ちの子どもたちなのでしょう。

【質問者 2】

基本的に診断があまりついてない軽い子たちなので、例えば発語が遅いとか、こう感情が爆発しちゃって、親御さんと上手く関われないっていうような、本当に何だろう、ボーダーラインのような色んな子たちが来る所なので、例えばすごく知的に遅れてるとか、自閉症の診断が出てるとかいう子たちではないのが対象の所で働いています。

【回答の通訳】

すごくいい質問をありがとうございます。私自身は発達心理学者ではないので、考えられることを概念に基づいてお話させていただくと、その今話しているような感情の特性というものが正しかったとして、になりますが、私たちがより感情的にも、感情を上手く使うことができるっていうことを目指していくならば、そのどこに難しさがあるかによって介入の方法は違ってくるはずだと考えられます。例えば子どもによっては、その衝動や刺激のコントロール、制御は難しかったとしても、自分が今どんなことを感情として経験しているのかっていうことを、認識する能力は高い子どもはいるはずです。ですので、その場合には、その衝動のコントロールのための介入や手助けってものが必要になると思います。例えば学校であれば先生がこう1から5までカウントするとか、そういった工夫が必要になったりとか、あるいは環境的にその刺

激を制御したりとかコントロールするっていうことも必要になるかもしれませんし、あるいは逆に自分自身の気持ちや、こう理解することが難しい、あるいは特定することが難しい子もいるかもしれません。そうすると、違う形でその子がわかるように感情についての概念を教えるっていうことが必要になるかもしれません。なので、その子どもが持っている難しさに合わせて、感情のサポートをしていくっていうことが必要になるかと思います。そういったことに合わせて様々なスキルが求められますが、残念ながら私は実践家ではないので、このときにはこうしたらいによってことがアドバイスできないんですが、私が言えることとしては、今の段階ではこういったことだと思います。

【質問者 3（英語での質問を岡田先生が通訳し、武藤委員も補足）】

感情の専門家ではないので、ご質問させていただきたいんですが、感情の発達と、感情の理解だったり道理づけ、ですかね、えっと……（武藤補足：Theory of mindの話とか、心の理論とか、4歳ぐらいになると例えば相手の言っていることが、自分が思っていることと違うっていうことがわかる、みたいな。ほかの人にも心があるんだっていうのがメンタライジングっていうことなんですけれども。質問者3補足：自分の思いとか、ほかの人の思いとか、あとこのリーズニングの問題解決するためにどうすればいいかということを考える思考ですね。武藤補足：そのあたりの違いと、エモーションとの違いですかね。）特に反射的な自動的に起こる反射を考慮しない、その部分を削除した場合の、心の理論と、それから今言っている感情発達の違いについてを説明いただけますか。

【回答の通訳】

すごく質問していただいてうれしい内容ですが、メインのこの違い、中核的な違いというのは、かつての基本感情とそれから私が、今提唱させていただいている基本感情を、違いを考えると、感情というのは自動的に機能するわけではない、反射的なものではないということを見ると、今まで言われていた、道理づけ、リーズニングと、それからパッション、情熱の間の壁であったりとか、それから、感情か理性かという、その区別の、区別っていうのがなくなるわけですね。つまり、私の提唱している理論によって、橋渡しをするということになります。ですので、今、心の理論についてのお話もありましたが、感情というのは私たちに衝動をもたらします。そしてその衝動というのが、様々な表れ方あるいは抑制のされ方というものがあるわけですね。この道理づけ、リーズニングというのは、もちろん、情熱、パッションにも影響を与えるわけですが、

その行動というものも考えたときには、行動に、行動ってというのは私たちに何をすべきか、というのをあらかじめ決められているわけではないんですね。それは、何か感情が起きたときには、その行動を示唆するわけですが、そのどの行動の選択肢を取るかというのは、私たちの理性であつたりとか、様々なほかの要因が働いて、その行動を選択していくってということが起こるわけです。こういった形に今までの理論と私の提唱していることがこう合わさっていくような、統合されていくような形になります。

【司会・近藤委員からの質問2】

はい、すいません、じゃあ、司会者特権でもう1問だけ聞かせていただければと思います。

今度は研究的な観点から質問したいと思います。おそらく今回参加者、研究者は、数値やデータが一度も出てこないプレゼンを聞くんっていうことにけっこう驚いたのかなという風に思います。なので、感じてるもやもやとしては、話としてはわかるんだけど、どんなデータがあれば、今回の話が正しいっていう風なことを認められるのかってところが少し気になるのかなという風に思います。特に、感情は行動傾向であつたり、心拍数であつたり、脳波であつたり、いろんな指標でデータが取れる分野です。先生の新しい基本感情理論に立脚した場合に、こんな新しい研究デザインが構想できるとか、こういう面白いデータがとれるとか、具体的なデータのとり方として、あれば聞かせていただければと思います。

【回答の通訳】

(スライドNo.63,64の「新しい基本感情理論、新しい経験的予測」のスライドを示しながら)ご質問ありがとうございます。今日お話しすることができなかったスライドなんです、タイトル「新しい基本感情理論、新しい経験的予測」と書いてあるスライドに載っている内容ですが、これを見ると、確率的活性化というものが載っています。これは「状況依存的行動選択の促進または抑制」とあります。ここでは例えば、脅威としては、捕食者を恐れているネズミがいたとします。

この捕食者を恐れているラット、ネズミの例をお話しすると、著名な研究者ファンセロウの研究に基づいたお話になりますが、その脅威に直面したラットが取る行動としては、その脅威が遠い場合には、遠い場合と近い場合と差し迫った場合、それぞれに違うとされています。まず遠い場合には、非言語的のシグナルや、生理的反応、運動の変化、主観的経験、脳活動における変化がセット1として起こるとされています。ここでは、その遠い、脅威が遠いときには、その自分に

とっては捕食者が現れたときにはまずそちらを見ると、定位づけの反応が起こるということが言われています。これは過去にもそういった状況があつて、その過去の経験に基づいた反応とも言えます。

そして、それとは別の、脅威が近い場合については、先ほどとは違う非言語的のシグナルや生理的变化や運動変化、主観的経験、脳活動における変化というものが起こります。この場合は、その定位づけ反応ではなくて、フリーズ反応というのが起こります。つまり、その猫だけに注目をしているという場合です。

そして、脅威が差し迫った場合つまり、その捕食者である猫がもうまさに自分に飛びかかってくるという状況だった場合には、また別の非言語的のシグナルや、生理的变化、運動の変化、主観的経験、脳活動における変化というものが起こります。ここでは、闘争-逃走反応、fight-flightの反応が起こります。ここでは、経験的予測というのは、つまり脅威がどれくらいの距離にいるのか、近いのか遠いのかということによるということです。例えば今は、この脅威、恐怖についてお話ししていますが、例えば怒りというのは、また表れ方が違いますし、自分の大切に思っているゴールが脅かされたときに、その反応の表れ方というのは個々に違うということです。それは、決まったものがあるわけではなく連続体としても表現することができます。そして、どのような、その感情の表出に影響を与えるものとしては、刺激の種類であつたり、あるいは周囲の人の存在であつたり、あるいは自分が使うことのできる対処リソースがあるかどうかということにも影響を受けます。こういったことによって、より複雑なプロセスになるわけですが、経験的予測というのは、例えば怒りであつたり、嫌悪であつたりとか、この場合、恐怖という感情に基づいているということが言えるわけです。

今、これを申し上げた上で、これはあくまでも予測ですので、皆さんにぜひ協力をお願いしたいことは、日本の皆さんと共に、こういった今は予測の段階ですので、実践では、現実的には本当はどうかということをぜひ一緒に研究をしていきたいと思っています。人間、すべての人間、そしてすべての感情に対して、該当するような感情についてですね、ここでは、恐れや怒りや、罪悪感などが含まれますが、そういった働きについてぜひ皆さんと共に研究していきたいという風に考えています。

【武藤委員からの補足】

(英語で)ありがとうございます。ぜひ協働しましょう。日本にぜひ戻ってきてください。(中略。以降は日本語で)補足したかったのはですね、結局、どういう研究になるんだろうと思ったと思うので、一応

言っておくってことなんですけれども。ここは実はちょっと、心理学的な構成主義というか、あの、真っ向から対立するような、リサ・バレットとかが言うてるやつとかともけっこう似てること実は言ってるなっていう風に感じましたので。実はバレットさんもこういこと言ってるんですね。状況によって、脅威が近づけば行為傾向は一緒かもしれないけど実際出てくる表出は違ってくるっていうのを、割とバレットとか、けっこう言ってること同じだなんて聞きながら、思ってたんですけど。これは多分、明日のシンポジウムでもしかしたら、ちょっと宣伝になってしまいますが、話をされるところかなと思うんですけども。

私がちょっと今聞いていて思ったのは、要は、今までの basic emotion theory っていうものは、実は元をたどればモチベーション的な伝統で考えるとやっぱり動機づけで考えていったほうがいいのではないかというのが彼（スカランティーノ先生）の立場で、エクマンとかトムキンスとかのほうが、むしろ異質、アウトライヤー、外れ値だったんだよと。これ、実はとても驚きのことなんですけれども、今まで皆さんたぶん、心理学の教科書とかで習ってきた基本感情理論というのは、基本的にはエクマンのモデルが一番有力で、アフェクトプログラムがあってっていう話だと思うんですけど、そこは反射的な、「これが来たらこれする」みたいな感じで、よく言われるのは“one-size-fits-all” っていうことですね。進化的に、なんかこれやっとならばその状況生き延びられるだろうといった進化的な考え方なので、赤い服を着とけばちょっと異性からの魅力高められるだろうみたいな感じで、実際にはそんなこと全然ない状況でも、とりあえずちょっと価値、生き残りの確率を上げるために、進化っていうのは結果的に備わったって考えられるわけですよ。

ただ、動機づけが大事だっている風に考えると、そうですね、どれくらい差し迫ったときに例えば宿題をやるかとかレポート書くかみたいな話ですけど。別に、すごい大事な試験勉強でも、目標の期間がですね、1 年後とかだったら全然焦らないかもしれないですけど、本当に 30 分後だったらとても頑張るかもしれないし、もう諦めるかもしれないっていう風に、本当にいろいろ行動のオプションが出てきます。今までの basic emotion approach だと、そこがうまく説明できなかったんですね。なので心理学的構成主義の立場からすると、やっぱり、バレットとか、「バリエーションが標準だ」という風に、“Variation is the norm.” っていう風に言ったりもしていて、2017 年に。状況によっては、喜び 1 つとっても、泣くこともあるし、笑ったりすることもあるし、そういうことで、1 対 1 対応、1 出来事が起こって、それに対して同じような行動が出るとか、全然そんなこと実証的に見ても

ないので、否定される、ってことなんです。

ただ彼（スカランティーノ先生）の場合は、動機づけ的に考えると、柔軟な行動オプションがいくつも用意されていて、そのときどきで状況に適切な、行動オプションが出てくると。ただ、やっぱり繰り返し、その大事なメッセージとして、繰り返し生じてきた問題なんだと。繰り返し生じてきた進化的な問題というのが、われわれの心には備わってきて、それが進化して感情プログラムという風になったっていうところで、その仮定は、実は変わってない。適応なんだけれども、すごいオープンで、開かれている行動プログラムなんだっていうのがたぶん彼の主張なのかなと。

なので、そこと、心理学的構成主義の立場とはやっぱり、似て非なるところはある。もともと生物として進化的に備わったプログラムがあると考えるか、もう経験で、脳が経験することで、予測的符号化とか、最近ホットな話題ですけども、その時々でどんどん学んでいって、学習が大事っていう風に考えて、本質的なプログラムとかアフェクトプログラムがないって考えるセオリーと考えるかで、やっぱり、違いは出てくるんですけども。なんですかね、心理学的構成主義の理論に対する 1 つの解決策っていうことで、要はあの、多分、分岐図があったと思うんですけど、従来の基本感情理論ダメだから心理学的構成主義に行こう、じゃなくて、とりあえず基本感情理論の中を、もうちょっと伝統を掘り起こして、ちょっと上手く実験的に、あの手く成功できるような、例えば条件 1 では猫が遠くにいる場合、条件 2 では猫が近くにいる場合、条件 3 では猫がすごい目の前にいる場合で、ラットを置いて、どういう行動が表れるかっていう実験をやって、そうするともう基本的には、逃げるとかそういう行為傾向が仮定されるわけなので、そこで実際フリーズするか、立ち向かうか、そういう行動の予測は基本感情理論から、新しい基本感情理論からも立つでしょう。それを皆とやっていきたいなっていうメッセージだったのかなと思います。

【司会・近藤委員からの応答】

具体的なデータの話ではないけれども、オープンプログラムっていう考え方で、この考え方について、思ったのは、やっぱり突拍子もない感情表出をかなり説明しうるのかなと。例えば、人を叩いても笑っちゃう子、みたいな子たちを見たときに、なんか僕たちはそれを間違った学習っていう風に捉えるけれども、実は繰り返しその子にとって大事なモチベーションがあるっていう風に捉え直すと、そこがつながるっていうのは、喜びっていうベーシック感情がかなりオープンな形でプログラムされているから、普通はそのつながらなくてしょって感情表出が、かなり説明しうるような、

ひょっとしたら理論なのかなっていうことを、お話を受けて少し考えました。という、コメントに対するコメントになりました。ありがとうございます。

【感想】

感想プラスアルファ、ちょっとだけいいですか。臨床発達心理士の現在仕事をしていますが、重度の子どもとか、0歳から高校生までの年齢の子どもたち、障害のある子どもたちにもずっと長く、養護学校で接してきた者です。その中で経験したことをいくつかかかね、ちょっとだけお話をします。

今日のお話は、子どもの状況をすべてトータルにいろんな分野から考えて把握するっていうところで、すごく共感します。そこでこれを言わなくちゃってね、みんなね、だってさ、認知で低かったらさ、ものがわからないみたいな状況まだまだ続いているでしょ。違うでしょっていうのは現場で子どもたちを見ていて思います。あるときにこういうことをしていました。もちろん重度で自分で動くこともできないお子さん。そういうお子さんが、みんなの中で、みんなの中というか、ある集会でね、前に出て、車椅子のままですよ。前に出たときに、実は指にSpO2、酸素飽和度のあれつけててね、あのお子さんね。そのお子さんが前に出て、自分が前に立ったときにね、酸素飽和度がバーンと下がるんですよ。卒業式のときに、ある先生がそばに来たら、バツと下がっちゃたっていうようなこともあるんですね。そういう機械をちょっとね、つけてやったりしてましたけど、個人情報がどうのこうの、全然そんなのは表に出せませんし、そういう実態がありました。

現在私は小学生の、東京での巡回の相談とね、発達障害のお子さんなんかの巡回と、それから子ども園で仕事をしています。子ども園では主に3歳4歳5歳の子、0歳からみんないるんだけど、3、4歳、5歳の子どもたちと一緒に遊びながらね、子どもの状況を把握する。そのときにこの感情の考え方。これがさ、すごく、本当にそうだよ、そうだよって。そのときの状況によるし、体の状態によるし、相手の関係にもよるし、場の状況にもよるし、それによって日々変わります。

そのときに、私が大事にしていることは、その気持ちを共有すること。だから、「ママ、ママ」って言ってね。もう、ママがいないから泣いてるようなお子さんでも、でも、うん、ママ、どう言ったら、そこにおれないからね。だから「そうだねえ、パパもママもいないよね。でもさ」って言ってね、こないだはね、「ちょっとちょっと、お外見て。わあ綺麗な空だね。」そうして「ちょっと暑いけど、ぴかぴか光っているよね。」と言うと、泣きやむじゃないですか。そうやっ

て、泣きやんで、そしたら、「あんな、お家に帰ったらパパやママにまた会えるからね。」って言ったら、「うん」って納得するようになるんですね。これ3歳です。だからその場で、お子さんに、共有しつつ、場の状況を考えて、必要なことを必死で考えて、接するっていうのがすごい今大事やなあと。日々それを、あの、様子を、手書きでバーっと書いてね。先生方と相談をしています、大いに勉強になっています。

ですから、今日のこの感情の学習は、大いに勉強になりました。すごく良かったです。ありがとうございます。

【スカランティーノ先生】

ありがとう。ありがとう。

【質問者4】

哲学的なお話というのは非常に刺激的であったなという風に思うんですけども、哲学的であるからこそわからなくなったところがちょっとあって、お伺いできればと思います。一番最初にも出ていたんですけども、感情理論はそれぞれの感情を互いに区別できなければいけないというお話だったんですけど、動機づけの話っていうのがすごくわかりやすかったんですけど、動機づけの話からいくと、どんな風に感情を互いをこう区別できるんだろうかっていうのがちょっとわからなくなってしまっていて。つまり私のハッピーがこの人のハッピーじゃないかもしれないし、とかっていう風になってくるとだんだんわからなくなってしまったので、どういう風に、この感情とこの感情がありすよっていうことを区別するのかっていうのが1つ、と、もう1つが、感情理論のところでは、感情の強さってすごく大事だと思うんですけど、どういう風に理論の中に組み込まれているのかなっていうのがあって。感情調整するとかいうだけではなくて、例えば、敵から逃げるために恐怖が生じるとしても、あまり強すぎる恐怖だと、逃げられなくなってしまうわけで、適切な強さでなければたぶんいけなかったりとかすると思うんですけども、そういう強さみたいなのは考えたりするんでしょうか。

【回答の通訳】

ご質問ありがとうございます。今、主に2つのご質問いただいたと受け取ってるんですが、1つはその感情の役割とどのように区別するか、ということと、もう1つは感情の強さは関係するのかなということだったと思います。

そうすると、フィーリング、感情というか、フィーリングの感じや、感じや気持ちの役割に関してのご質問という風に受け取ると、その私たちのアプローチで

は、まずこのフィーリング、感じや気持ちというのを中心に据えるってことはしていません、が、かといって無視を、完全に無視するわけではありません。特に、この動機づけと関連して考えると、おっしゃる通りそのフィーリングというのは人によって違うものでもあります、その動機づけの観点ですと、今日お話できなかった感情価という考えがあって、それに快-不快の概念がありますが、例えば、怒りや憎悪というのは不快にカテゴライズされて、喜びというのは快とカテゴライズされるわけですが、その役割、動機づけの観点からいうと、不快とされる恐怖をずっと長い時間感じているというのは嫌ですね。なので、そういった意味でもそれを、その不快な感覚を取り除くためにも何か行動させるといって、その動機づけの観点でみるということが出来ます。

もう1つのご質問、この感情の強度についてですが、おっしゃる通り、これ重要な点でもあるにもかかわらずあまり注目されて議論される機会が少ないトピックでもあります、(感情研究者の戸田正直氏も感情の強度について重要な示唆をされたように)まずはこの強度についてどのように理解するかというのは非常に重要なポイントだと思います。測りにくいことでもあると思います。例えば、どのようにそれを測るかという、この動機づけの観点からいうと、どれくらいそのゴールに向かわせる力があるかどうかということが、直接その感情の強さに結びついているのではないかと考えられます。つまり、そのゴールに、向かうための行動をさせるくらい、優先度が高くなるかというところがポイントとなります。例えば具体的な例をお話しさせていただくと、不安な気持ちってというのが中程度な場合、例えば私たちの生活の中では、人の前でスピーチをすとか、その不安の度合いというのは、その脅威がすごく高いわけではないけれども、不安はある程度高いという状況だと思いますが、そのときには、不安にも対処しながら、ほかのこともできると思うんですね。ですが、それよりも脅威が高まっている状態、不安が高い状態というのは、例えば、銃を突きつけられているような場面においては、もうそこから回避すること以外は何もできなくなるわけですね。なので、そういった意味では、おっしゃる通りその強度というのは、私たちが、安全を守るためだけの行動をとるのか、あるいはほかのことができるかということにも非常に関わっていますし、その、感情においてのこの議論においてもその度合いというのは、そういった意味でも非常に重要だと考えられます。

【質問者 5】

目的、というか問題を何度も何度も経験して、それ

を解決するっていうところで、感情の見方をみれてすごく納得感を持ってお聞きしておりました。私は、そのお子さんが怒った、とか、笑ったっていうときに、親から、どういう外的な調整を受けるか、というような、言葉がけを受けるのかなっていうのに関心があります。おそらく先生のお話の中で、子どもが何度も何度も同じところに問題を抱えて、そこの解決を親側からこう、してもらって、それをだんだんと獲得していくっていう、ある意味進化とか文化よりすごく、短いタイムスパンでの、感情を獲得していくところなのかなという風に聞いておりました。そこで1点気になっていたのが、例えばお子さんが、新しいところに不安で行きたくないって。で、それに対して、お母さん側が、何かしら調整をするっていうときに、もちろん実際そのお子さんの問題に対して、お母さんが、まあなんか嫌でも行ってみたらとか、そういう調整をするっていうところもちろんあれば、一方でその、わあ、ってその、わあーがお母さんにとって、あの、すみません、言語化できない。そのお子さんがすごく騒いでいるっていうか、しかも時間がない、みたいなほうが問題になっていて、お母さん側にとっては問題になっていて、それを調整するために何らかの働きをするっていう。その、だから、何を問題とするのかっていうところが、お子さん側の問題と、お母さん側の問題、ちょっと2種類になっちゃうところも、もしかしたらあるのかなという風に思いました。そういったときに、先生的には、そうはいってもお子さんの抱えている問題を全部一緒でもう見ていくのか、それとも、お母さん側のその問題、目的が、2種類あるので、そこを区別して考えるべきなのか、どういう風に先生だったら考えられるのかなあというのが気になりました。

【回答の通訳】

ご質問ありがとうございます。今のお話を伺っていて、毎朝自分が娘を学校に連れて行かなきゃいけない状況のことをすごく思い出しながら伺いましたが、このお話も、理論をどのように現実活かししていくか、というポイントが非常に大切になるかと思いますが、感情というのは1つだけ経験されているわけではなく、その瞬間にも次々といろんな感情が起きていたり、同時にいろんな感情が起きたり、時には出ている複数の気持ちが相反するものであったり、そういったこともありますよね。今、例に挙げていただいたお話では、お母さんのゴールとしては、仕事に行くというゴールがあって、と同時に学校に連れて行くというゴールもあって、で、その状況で子どもが泣いているというのは、そのゴールがばかられている、つまり、障害になっている、ゴールに対しての障害になっているということですね。

で、娘のゴールは何かというと、学校に行きたくないということですよね。なので、親のゴールが、仕事に行く、あるいは娘を学校に連れて行くというゴールに対して、娘のゴールは学校に行きたくないというものになるので、2つともそれぞれのゴールが違うということがまず1つです。ということは、解決策も1つではないということですよね。子どもは今すべきことは何かということを理解したり、母親は、自分の怒りに対応するということが必要になるかもしれません。

私が実際に、毎朝娘を学校に連れて行くために、何をしているかということ、もし娘が学校に行きたくないという風になったら、学校に行かなかったらどうなるかということ、説明をする、お話をするということをしています。もし行かなかったとしたら、ホームレスになる可能性もあるわけですよね。なので、行かなかった場合に起こる選択肢としては、学校に行く、行くか行かないかを考えたときに、今の生活がどうなっていくか、その選択肢を考えると、1つはこのまま学生でいることができる、学校に通い続けるということ、あるいは仕事を持つということ、仕事をしていくことができるということ、あるいはホームレスになってしまうという、その3つがあるときに、子どもの年齢を考えるとまだ仕事の話は出てきていないので、実質2択ですよね。学校に行くかホームレスになるか。そうすると、学校に行くということを子どもは選ぶので、この話は、私の娘には今のところ機能しているようです。

【司会・近藤委員】

はい、ありがとうございました。えっと、まだひょっとしたら質問・意見、ある方もおられるかもしれませんが、ちょっと時間が来てしまいましたので、ここでクローズとさせていただきますと思います。改めまして、講師のスカランティーノ先生、通訳を務めていただきました岡田志保先生へ拍手のほうをよろしくお願いいたします。

Emotional Development and the New Basic Emotion Theory

1



Andrea Scarantino, Department of Philosophy, Georgia State University
Open Lecture, Tokyo, Japan
August 4, 2024

感情発達と新しい感情理論

2



アンドレア・スカランティーノ, ジョージア州立大学哲学科
公開講演会, 東京
2024年8月4日

Today's Objective

3

- To introduce you to what I call the **New Basic Emotion Theory (BET)**, and to explore its implications for **theories of emotional development**
- The **New BET** is the result of various **theoretical influences**
 - Basic emotion theories in affective science (e.g. Ekman, Izard)
 - Action tendency theories in affective science (e.g. Frijda)
 - Functional theories in affective science (e.g. Campos)
 - Motivational theories in philosophy (e.g. Deonna and Teroni, Scarantino)
- Despite having been **widely criticized**, basic emotion theory **continues to have a lot to offer to emotion theorists**, provided it is **modified** in some important ways
- The core idea of the **Old Basic Emotion Theory** that the **New BET** aims to preserve is that emotions are **solutions to recurrent problems** which are so **fundamental in the life of the organism** that a **special-purpose solution** must be engineered to **solve them**

本日の目的

4

- 私が**新しい基本感情理論(BET)**と呼ぶものを紹介し、感情発達理論への含意を探ること
- **新しい基本感情理論(New BET)**は、さまざまな**理論的影響**の結果である
 - 感情科学における**基本感情理論** (e.g. エクマン, イザード)
 - 感情科学における**行為傾向理論** (e.g. フライダ)
 - 感情科学における**機能主義理論** (e.g. キャンボス)
 - 哲学における**動機づけ理論** (e.g. デオンナ & テロニ, スカランティーノ)
- **広く批判されてきたにもかかわらず**, 基本感情理論は、もしいくつかの重要な方法で修正されるのであれば, **感情理論家に多大な貢献をし続けるだろう**
- **新しい基本感情理論が保持しようとする古い基本感情理論の中核となる考えは、感情は、生物の生活において根本的な、繰り返し生じる問題への解決策なので、そうした問題を解決するために特別な目的を持った解決策が設計されなければならないことである**

From Folk Psychology to Emotion Theory

5

- Emotions prototypically are things like love, hate, anger, fear, surprise, guilt, shame, happiness, sadness, disgust, envy, hope, etc.

→ A theory of emotions must account for what these things have in common (if anything), for what distinguishes them from one another, and for what distinguishes them from non-emotions

- Emotions prototypically include a variety of components: cognitive, expressive, physiological, phenomenological, behavioral components

→ A theory of emotions must explain how and why these components co-occur to the extent that they do, tell us what emotions are and find out theoretically interesting generalizations about them

Three Research Traditions on Emotion

7

- The **Feeling Tradition**, which takes emotions to be **essentially feelings** of a distinctive kind
 - Popular in Ancient Greece and Rome, dormant in Middle Ages, on the rise again in 17th c. with Descartes and Locke, canonical with James-Lange
- The **Cognitive Tradition**, which takes emotions to be **essentially evaluations** of a distinctive kind
 - Popular in Ancient Greece and Rome, on the rise again with Brentano in the 19th c., dominant since the 1960s with the cognitivist revolution
- The **Motivational Tradition**, which takes emotions to be **essentially motivations to behave** of a distinctive kind
 - Foreshadowed by Aristotle, popular in the Middle Ages, with major 17th c. proponents like Spinoza, Hobbes and Malebranche, currently on the rise

素朴心理学から感情理論へ

6

- 感情は、プロトタイプ的には愛、憎悪、怒り、恐れ、驚き、罪悪感、恥、喜び、悲しみ、嫌悪、妬み、希望などのようなものである

→ 感情理論は、これらに共通するもの(もしあれば)、互いを区別するものの、感情でないものから区別するものを説明しなければならない

- 感情は、プロトタイプ的にはさまざまな構成要素を含む：認知的、生理的、現象的、行動的要素

→ 感情理論は、どのように、そしてなぜ、これらの構成要素がある程度共起するのかを説明し、感情とは何かを私たちに伝え、理論的に興味深い一般化を見出さなければならぬ

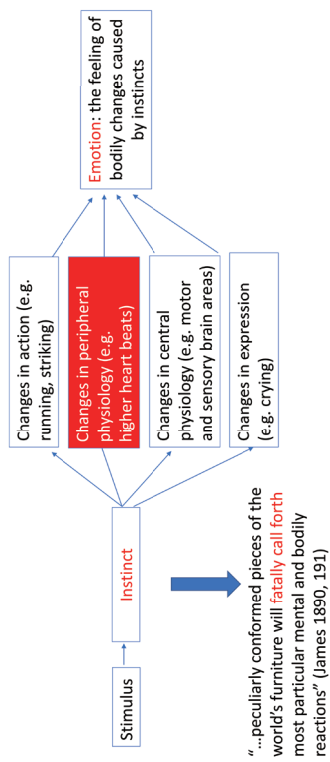
感情に関する3つの研究伝統

8

- 感じ・気持ち伝統は、感情を本質的に独自の種類の感じ・気持ちとする立場である
 - 古代ギリシア・ローマでは人気があったが、中世に低迷し、17世紀にデカルトとロックとともに再び台頭し、ジェームズ・ラーゲとともに正統化された
- 認知伝統は、感情を本質的に独自の種類の評価とする立場である
 - 古代ギリシア・ローマで人気があり、19世紀にブレントアノとともに再び台頭し、1960年代以降は認知主義革命とともに支配的となった
- 動機づけ伝統は、感情を本質的に独自の種類の行動を動機づけるものとする立場である
 - アリストテレスによって予見され、中世に人気を博し、17世紀にはスピノザ、ホッブズ、マルブランシュのような主要な支持者が現れ、現在台頭している

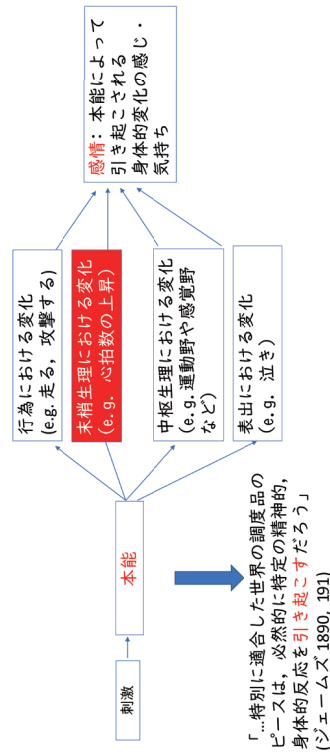
James' 1884 Account

9



1884 年のジェームズの説明

10



The Science of Fingerprints Is Born

11

- "...no reader of the last two chapters will be inclined to doubt the fact...the *changes* [brought about by instincts] are so *inaffinitely numerous and subtle that the entire organism may be called a sounding-board*. The various permutations and combinations of which these organic activities are susceptible make it *abstractly possible* that no shade of emotion, however slight, should be without *a bodily reverberation as unique, when taken in its totality, as is the mental mood itself*" (James 1890, Ch. 25, 450).
- Three crucial *take-home* messages were taken from James' theory (rightly or wrongly):
 - The changes in the *indicators* of emotions follow *reflexively* from the activation of an *instinct* (later turned into the emotion itself)
 - There *may** be a unique bodily reverberation/signature/fingerprint for each emotion
 - Emotions are *feelings* with no causal powers over the manifestations of emotion

指紋科学の誕生

12

- 「...前の2章を読んていれば、以下の事実を疑う気にはならないだろう...[本能によってもたらされる]変化は、大変膨大であり微妙なものであるため、さまざまな順列と組み合わせのおかげで、次のことが抽象的に可能になる。つまり、どんなかすかな感情の変化も、精神的な気分そのものと同様に、全体として捉えれば、それ特有の身体的共鳴なしには起こらないということである (James 1890, Ch. 25, 450).
- ジェームズの理論から(正誤はともかく)3つの重要なメッセージが読み取れた:
 - 感情の指標の変化は、本能(後に感情そのものになる)の活性化から反射的に続く
 - 各感情には、独特の身体的共鳴/サイン/指紋(はっきりとした特徴)がある **かも*れない*
 - 感情は感じ・気持ちであり、感情の表出に対して因果関係を持たない

From Fingerprints to Basic Emotions

13

- There is a **family resemblance** between:
 - Charles Darwin's *The Expression of the Emotions in Man and Animals* (1872)
 - Robert Plutchick's *The Emotions: Facts, Theories and a New Model* (1962).
 - Silvan Tomkins' *Affect, Imagery and Consciousness* (1962)
 - Paul Ekman's 'Facial Expressions' and 'Basic Emotions' in *Handbook of Cognition and Emotion* (1999)
 - Carol Izard's *The Psychology of Emotions* (1991)
 - Robert Frank's *Passions within Reason: The Strategic Role of the Emotions* (1988)
 - Tooby and Cosmides' 'Evolutionary Psychology and the Emotions' in *Handbook of Emotions* (2000)

指紋から基本感情へ

14

- 以下の間には**家族的類似**がある:
 - チャールズ・ダーウィン: 『人及び動物の表情について』 (1872)
 - ロバート・プルチック: *The Emotions: Facts, Theories and a New Model* (1962)
 - シルヴァン・トムキンス: *Affect, Imagery and Consciousness* (1962)
 - ポール・エクマン: 'Facial Expressions' and 'Basic Emotions' in *Handbook of Cognition and Emotion* (1999)
 - キャロル・イザード: 『感情心理学』 (1991)
 - ロバート・フランク: 『オデッセウスの鎖: 適応プログラムとしての感情』 (1988)
 - トゥービー&コスミデス: 'Evolutionary Psychology and the Emotions' in *Handbook of Emotions* (2000)

Key Innovation for this Crop of Theories

15

- Understanding **emotions** and/or some of their **specific features**, as **evolutionary adaptations**
- What is an **adaptation**?
- "An adaptation is a **phenotypic variant** that results in the **highest fitness** among a specified set of variants in a given environment" (Reeve and Sherman, "Adaptation and the Goals of Evolutionary Research", 1993, 9)
- The **Old Basic Emotion Theory** suggested that what evolved are **affect programs**, which **reflexively lead** to a cascade of **measurable responses in brain and body**

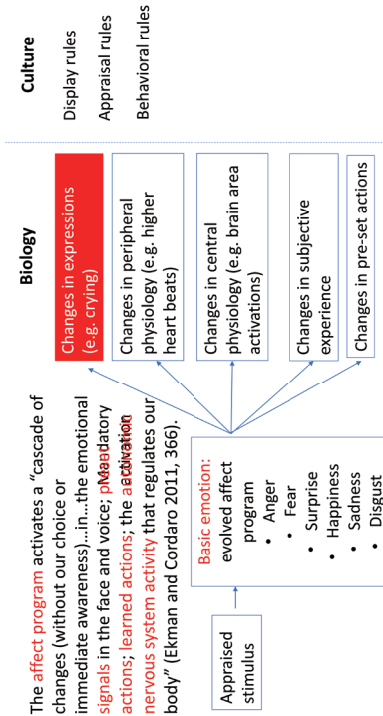
これらの理論の重要な革新

16

- 感情および／または感情特有の特徴のいくつかを**進化的適応**として理解すること
- 適応とは何か?
- 「適応とは、与えられた環境において、変異の特定集合の中で**最も高い適応度**をもたらす**表現型変異**である」(Reeve & Sherman, "Adaptation and the Goals of Evolutionary Research", 1993,9)
- 古い基本感情理論は、進化したものは**アフェクトプログラム**であり、それが**脳や身体における測定可能な反応の連鎖**を**反射的に引き起こす**と提案した

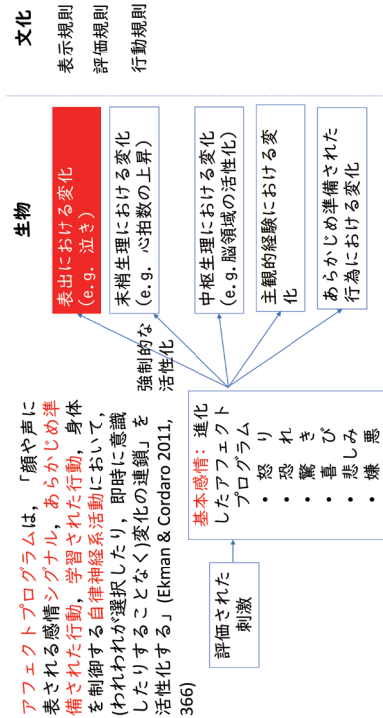
Ekman's Neurocultural Theory

17



エクマンの神経文化理論

18



Old Basic Emotion Theory and Development

19

- Izard's **Differential Emotions Theory** brought the **developmental implications of basic emotion** theory center stage (Izard & Malatesta 1987)
- First, Izard distinguishes between **basic emotions** (interest, happiness, sadness, anger, disgust, and fear) and **emotion schemas**, suggesting that basic emotions are an **evolutionary birthright**, whereas emotion schemas consist of basic emotions "**interacting dynamically with perceptual and cognitive processes** to influence mind and behavior" (Izard 2009, p. 8).
- Biologically determined **developmental timetable**:
 - Basic emotions like **interest, joy, and disgust** are present at birth, then **anger and sadness** emerge at 3 months, and **fear** emerges at 6-7 months (Izard et al., 1995).
 - **Emotion schemas** such as **guilt and shame** emerge during the toddler stages (starting at around 18 months), when socio-cognitive structures mature (but Izard did not specify exact maturational timetables for emotion schemas)

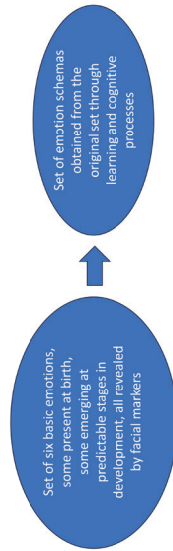
古い基本感情理論と発達

20

- イザードの**分化感情理論**は、**基本感情理論の発達の含意**を中心に据えた (Izard & Malatesta 1987)
- まず、イザードは**基本感情**(興味、喜び、悲しみ、怒り、嫌悪、恐れ)と**感情スキーマ**を区別し、基本感情は**進化的結果として生得的に備わったものであり**、感情スキーマは、基本感情が「**知覚および認知プロセスと動的に相互作用し**、心や行動に影響する」(Izard 2009, p. 8)ことから構成されると提案している
- **生物学的に決定された発達のスケジュール**:
 - **興味、喜び、嫌悪**のような**基本感情**は生まれたときから存在し、**怒りや悲しみ**は3ヶ月で現れ、**恐れ**は6-7ヶ月で現れる (Izard et al., 1995)
 - **罪悪感や恥**のような**感情スキーマ**は、**社会-認知構造が成熟する幼児期(18ヶ月後頃)**からに出現する(しかし、イザードは感情スキーマの正確な成熟スケジュールを明確にしていなかった)

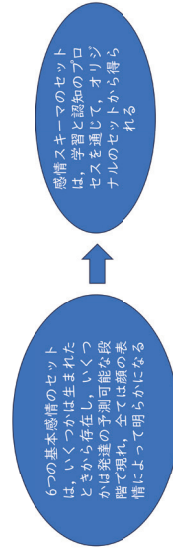
21

- Second, Izard at least initially assumed that we can tell whether an emotion is present in a pre-verbal child by detecting the **presence of reflexively produced facial changes** (but see Izard 2009 for an update)



22

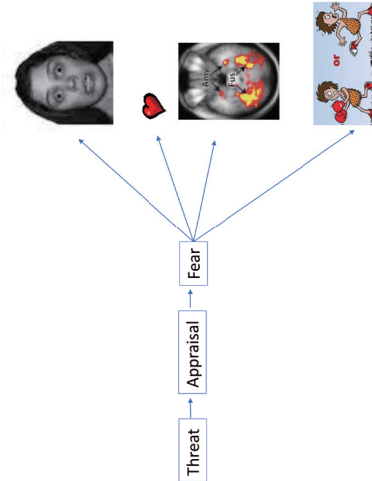
- 第二に、**イザード**は少なくとも当初、**反射的に生み出される顔の変化の存在**を検知することで、**言葉を話す前の子どもに感情が存在するかどうかを見分ける**ことができると想定していた(最新情報についてはIzard 2009を参照のこと)



Old BET is Empirically Flawed

23

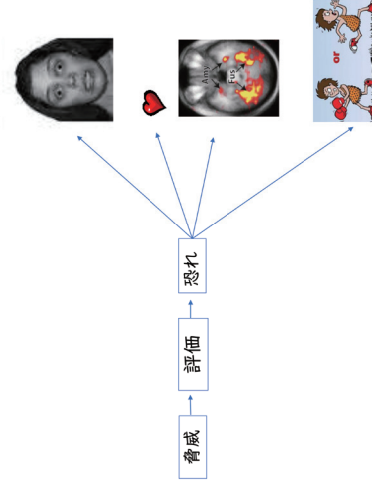
- There are **no nonverbal signals, autonomic changes, brain areas activations, or behaviors** always and only produced when **fear, anger, disgust** etc. occur (Barrett, Lindquist, Russell, Satpute, etc.)
- Although it was "**abstractly possible**" for anger, fear, sadness, etc. to have a unique "**bodily reverberation**" as James initially suggested, they **actually don't have it**



古い基本感情理論は実証的に欠点がある

24

- **恐れ、怒り、嫌悪などが生じたときに、常にまたは唯一生み出される非言語的シグナル、自律神経系の変化、脳領域の活性化、行動は存在しない** (Barrett, Lindquist, Russell, Satpute, etc.)
- ジェームズが最初に示唆したように、**恐れ、悲しみなどが独特の「身体的共鳴」を持つことは「抽象的には可能」だったが、実際にはそれはない**



Old BET is Conceptually Flawed

25

- Ekman's core insight: "[e]ach basic emotion prompts us in a direction that, in the course of our evolution, has done better than other solutions in recurring circumstances that are relevant to our goals" (Ekman and Cordaro 2011, 364)
 - Because of its speed
 - Because of what it communicates
- Reflexive behavioral programs are an implausible solution to the problems basic emotions allegedly evolved to deal with (e.g. danger, goal obstruction)
- Furthermore, there is no reason to restrict the operation of basic emotions to the solution of evolutionary problems – selection pressures for finding a domain-specific solution have been likely with respect to other recurrent problems in our cultural history

What Should Be Done About these Flaws?

27

- Give up on basic emotion theory entirely, as recommended by psychological constructionists
- Try to reform basic emotion theory, which like every scientific theory contains a hard core of non-negotiable assumptions (e.g. emotions are adaptations) and a protective belt of negotiable ones (e.g. affect programs work reflexively) (Lakatos 1970)
- Two proposals for reform:
 - Functionalism
 - New BET

古い基本感情理論は概念的に欠点がある

26

- エクマンの核心的洞察：「(それぞれの)基本感情は、われわれの進化的過程の中で、われわれの目標と関連する繰り返し生じる環境において、他の解決策よりもより良かった方向へとわれわれを駆り立てる」(Ekman and Cordaro 2011, 364)
 - その速さのため
 - それが伝える内容のため
- 反射的行動プログラムは、基本感情が対処するために進化してきたとされる問題(e.g. 危険、目標阻害)に対する非現実的な解決策である
- さらに、基本感情の働きを、進化的問題の解決策に限定する理由はない。領域特異的な解決策を見つけるための淘汰圧は、われわれの文化の歴史において、他の繰り返し生じる問題にも関わっていたかもしれない

これらの欠点について何をすべきか？

28

- 心理学的構成主義者が推奨するように、基本感情理論を完全に諦める
- 基本感情理論の修正を試みる。あらゆる科学理論のように、基本感情理論も譲れない前提である主要仮説(e.g. 感情は適応である)と、交渉できる余地のある前提である補助仮説(e.g. アフェクトプログラムは反射的に働く)を含む(Lakatos 1970)
- 修正のための2つの提案:
 - 機能主義
 - 新しい基本感情理論 (New BET)

The Psychological Constructionist Gambit

29

- Basic intuition: if emotions like anger and fear lack fingerprints in expressions, neurophysiological changes, or behaviors, then the distinctions between them must reside in our minds and not in nature (Barrett 2017)
- Psychological Constructionism: we should re-orient our theoretical focus from discrete emotions such as anger or fear to more primitive components out of which such emotions are constructed, specifically valence and arousal (Barrett 2005; Russell 2003)
- On Lisa Barrett's influential version of psychological constructionism, discrete emotions "emerge from" two main ingredients:
 - A substrate of Core Affect (a blend of valence and arousal)
 - Primitive, biological, non-cognitive, shared among distinct emotions and among non-emotional phenomena
 - An act of categorization (in more recent versions of the theory, an act of predictive coding)
 - Non-primitive, socially constructed, cognitive, distinctive for distinct emotions

31

- "Events called *anger*, *sadness*, or *fear* are emergent psychological events constructed from two more basic psychological processes: a *psychologically primitive* and *biologically basic* mammalian system that produces some variation on...*core affect*... and a *human conceptual system* for emotion" (Barrett 2007, Of Mice and Men)

- Core affect: a blend of valence and arousal values which is NOT specific to emotions
- Conceptual system: a system of categorization/predictive coding which is NOT specific to emotions

- Examples of how emotions emerge

- Categorizing a core affective state of high arousal and high displeasure as "fear"=being afraid
- Categorizing a core affective state of medium-low arousal and high pleasure as 'happiness'=being happy

- Key implication: emotions are perceiver-dependent



心理学的構成主義者の定跡

30

- 基本的な直観：もし怒りや恐れのような感情が表出や神経生理学的変化や行動において、指紋(はつきりとした特徴)を持たないならば、それらの間の区別は、自然界ではなくわれわれの心の中に存在するはずである(Barrett 2017)
- 心理学的構成主義：われわれは、われわれの理論的焦点を、怒りや恐れのような個別感情から、そのような感情が構成される、より原始的な要素、特に感情価と覚醒へと、理論的な焦点を向け直すべきである(Barrett 2006; Russell 2003)
- リサ・バレットの影響力のある心理学的構成主義では、個別の感情は主に2つの原料から「現れる」：
 - コア・アффекトの基盤(感情価と覚醒度のブレンド)
 - 原始的、生物学的、非認知的、個別感情の間や感情でない現象の間で共有される
 - カテゴリー化の行為(より最近の理論においては、予測符号化の行為)
 - 非原始的、社会的に構成される、認知的、個別感情に特異的

32

- 「怒り、悲しみ、恐れと呼ばれる出来事は、2つのより基本的な心理的プロセスから構成される創発的な心理的出来事である：1つは心理的に原始的で生物学的に基本的な唯乳類のシステムであり、コア・アффекトにいくらかの変動を生み出す。もう1つは、感情への人間の概念システムである」(Barrett 2007, Of Mice and Men)

- コア・アффекト：感情価と覚醒度のブレンドであり、感情に特異的ではない
- 概念システム：カテゴリー化/予測符号化のシステムであり、感情に特異的ではない
- どのように感情が創発するかの例

- 高覚醒で高不快のコア・アффекト状態を、「恐れ」とカテゴリー化＝恐れている
- 中～低覚醒で、高快のコア・アффекト状態を、「喜び」とカテゴリー化＝喜んでいる

- 重要な含意：感情は知覚者依存である



Flaws of Psychological Constructionism

33

- It assumes that emotions are experiences of a particular kind, but this view is a minority position in contemporary affective science, which more often conceptualizes emotions as motivational action-control structures
- Emotional experiences are affected by having emotion concepts, but they do not require having concepts
 - Phenomenal experience is not the same as second-order awareness (Lambie and Marcel 2002)
 - There is something it is like to experience shame (phenomenal experience) even if one does not know what one is experiencing (second order awareness), for instance because they lack a shame concept and are consequently unaware of what they are experiencing
- Emotions are not perceiver-dependent: Whether or not I, or John Smith over there, have an experience of a certain kind does not depend on what any observer or perceiver thinks about me or John Smith
- Psychological constructionism also makes the ascription of emotions to infants and animals problematic, because it is not obvious that they master the relevant emotion concepts

Functionalism as an Alternative?

35

- Functionalism has emerged as an influential alternative to the Old Basic Emotion Theory in developmental psychology
- Although it is insightful in several respects, Functionalism ends up throwing away the baby with the bathwater: it fails to capitalize on Ekman's core insight that today's emotions are influenced by a history of selection
- I will propose that we merge some of the virtues of the Old Basic Emotion Theory and of Functionalism into a better successor theory: the New Basic Emotion Theory
- According to the functionalist view, emotion is a "bidirectional process of establishing, maintaining, and/or disrupting significant relationships between an organism and the (external or internal) environment" by means of action tendencies that affect one's relation to things appraised as being of personal significance (Barrett & Campos, 1987, p. 558; Frijda 1986)

心理学的構成主義の欠点

34

- 感情は特定の種類の経験と仮定しているが、この考えは現代の感情科学では少数派であり、感情を動機づけの行為—制御構造として概念化することのほうが多い
- 感情の経験は、感情概念を持っていることによって影響されるが、概念を持っていない必要はない
 - 現象的経験は、二次的意識とは同じではない (Lambie and Marcel 2002)
 - たとえ何を経験しているのか分からなくとも(二次的意識)、例えば、恥の概念を持ち合わせていないために、自分が何を経験しているのかを認識していないとしても、恥を経験する(現象的経験)という何かがある
- 感情は知覚者依存ではない：私や向こうのジョン・スミスがある種の経験をしているかどうかは、観察者や知覚者が私やジョン・スミスについてどう考えるかによって決まるわけではない
- 心理学的構成主義はまた、乳児や動物に感情を帰属することを問題にする。なぜなら、彼らが関連する感情概念を習得しているかは明らかでないためである

代替案としての機能主義？

36

- 機能主義は発達心理学において古い基本感情理論に代わる影響力のあるものとして出現した
- これはいくつかの点においては洞察に富んでいるが、機能主義は結局細事にこだわりの大事を遂げてしまった：今日の感情が淘汰の歴史によって影響を受けているエクマンの核心的洞察を十分に利用できていない
- 私は古い基本感情理論と機能主義の長所のいくつかを統合し、より優れた後継となる理論を提案する：新しい基本感情理論
- 機能主義的な考え方によれば、感情は、「個人的に重要なものとして評価されるものと個人との関係に影響する行為傾向によって、生物と(外的もしくは内的)環境の間の重要な関係性を構築、維持、およびまたは阻害したりする双方向のプロセス」である (Barrett & Campos, 1987, p. 558; Frijda 1986)

Differences Between Functionalism and Old BET

37

- From basic emotions being defined in terms of packages of automated responses to emotions defined in terms of goals embedded in action tendencies
 - Fear is not a suite of fear-specific responses but the tendency to avoid potential harm
 - This avoids the lack of fingerprints problem that damned the Old Basic Emotion Theory
- Higher-cognitive emotions are no longer cognitive and perceptual elaborations of basic emotions – e.g. guilt is no longer an emotion schema obtained from a combination of basic emotions, it is its own process of relationship realignment
- Facial expressions shift from being automated readouts to being strategic signals aimed at influencing an observer to the advantage of the signaler (cf. Behavioral Ecology View, Fridlund 1994)
 - Behaviors which have traditionally been viewed as involuntary expressions of the organism's psychological state are instead viewed as signals designed to influence the behavior of other organisms, and as strategic 'moves' in an ongoing transaction between organisms (Griffiths and Scarantino 2008, 438)
- The appraisal of significance that activates emotions becomes more infused with social influences
 - Emotional contagion, social referencing

機能主義と古い基本感情理論の差異

38

- 自動的な反応のパッケージという観点から定義される基本感情から、行為傾向に組み込まれている目標という観点から定義される感情へ
 - 恐れとは、恐れに特異的な一連の反応ではないが、潜在的な損害を避ける傾向である
 - これは古い基本感情理論が強く非難されてきた指紋の問題の欠如を回避する
- 高次認知感情は、もはや基本感情の認知的・知覚的精緻化ではない。例えば、罪悪感、もはや基本感情の組み合わせから得られた感情スキーマではなく、関係性の再調整という独自のプロセスである
- 顔の表情は、自動的な読み出しから、シグナルを送る側に観察者に影響を与えることを目的とした戦略的なシグナルへと変わる (cf. 行動生態学的観点, Fridlund 1994)
 - 従来は生物の心理状態の不随意的表出と見なされていた行動は、代わりに他の生物の行動に影響を与えるために設計されたシグナル、あるいは、生物間の継続的なやり取りにおける戦略的な『動き』として見なされるようになる (Griffiths and Scarantino 2008, 438)
- 感情を活性化させる重要性の評価は、社会的影響により強く影響されるようになる
 - 感情伝染, 社会的参照

Social Referencing

39

- "A process whereby an individual seeks out emotional information in order to make sense of an event that is otherwise ambiguous" (Sorce et al. 1985, 289)
- One-year-old infants were placed in front of a visual cliff – a 30 cm drop covered by plexiglass – across from their mothers, who were instructed to produce smiles and the fear face (Sorce et al. 1985)
- Results (Sorce et al. 1985):



When mother smiled...	...14 out of 19 infants crossed the visual cliff
When mother showed fear face...	...0 out of 14 infants crossed the visual cliff

社会的参照

40

- 「曖昧な出来事について理解するために感情的情報を得ようとするプロセス」 (Sorce et al. 1985, 289)
- 1歳児が、アクリル板を張った30cmの落差がある視覚的断崖の手前に置かれる。対岸にいる母親は、笑顔／恐れ顔をするように指示されている (Sorce et al. 1985)
- 結果 (Sorce et al. 1985):

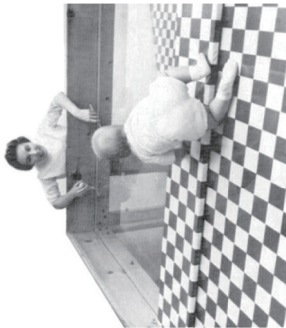


お母さんが笑顔...	...19人中14人が視覚的断崖を渡った
お母さんが恐れ顔...	...14人中誰も視覚的断崖を渡らなかった

Emotional Expressions as Social Tools

41

- A natural interpretation of what is going on in the modified visual cliff experiment is that mother and infant are having a dialogue whose currency consists of emotional expressions rather than words
- Intuitively, the mother is **showing** rather than **telling** the child certain things, and the child is **picking them up**
- What I want to point your attention to is that the mother is not simply **expressing her inner states of fear or happiness**; she is using her face as a **tool to negotiate a social transaction**



社会的ツールとしての感情表出

42

- 修正版視覚的断崖実験で起きていることを自然なかたちで解釈するなら、母子は言葉ではなく感情表出を使って構成した対話を行っている
- 直観的に、母親は特定のことを示しているのであり、話しているのではない。そして子どもは母親が示す情報を受け取っている
- 注目していたきたいのは、母親が単に自分の内的な喜びや恐れ状態を表現している訳ではないということ：自分の顔を社会的な交渉ツールにしている



43

- The mother's facial movements appear to have **communicative points** that go beyond **expressing what is inside**
 - **Representing** the situation as, respectively, **dangerous** (fear face) or **safe** (smile)
 - **Demanding** that the infant **stops** in his tracks (fear face) or **continues** in his motion (smile)
- **Question:** How many of the things we can **say** with language can be **shown** with emotional expressions alone?
- I give my answer in the **Theory of Affective Pragmatics**, published in 2017(Scarantino, 2017; I will also give my answer in the JSRE academic seminar's **invited talk tomorrow**, when I introduce the theory)

44

- 母親の表情の動きは内面の表出にとどまらず、コミュニケーションの要点になっていると考えられる
- それぞれ、危険（恐れ顔）か安全（笑顔）かの状況を表現している
- 子どもが動きを止めるように（恐れ顔）／進み続けるように（笑顔）要求している
- 問：言語で言える物事のうち、感情表現のみで示せるものはどれくらいあるだろうか？
- 私なりの答えは、2017年に発表した感情語用論理論の中にある(Scarantino, 2017;明日の日本感情心理学会学術セミナーでの招待講演でこの理論を紹介する際にも答えをお知らせする予定)

Functionalist View on Development

45

- If emotions are **relational processes** rather than cascades of reflexive responses (as per Old Basic Emotion Theory), measuring whether preverbal children have a certain emotion cannot be done by merely checking on facial movements
- It requires **checking** whether a given **action tendency** is instantiated in a **relational context**
- Because it is in the nature of action tendencies to be multiply manifested, we need to be **observationally careful** and attuned to **functional equivalencies**
 - Example: Sroufe and Waters (1977) proposed that assessing a tendency of **seek proximity** in an infant-mother relationship is not a matter of measuring actual physical distance, but requires checking whether the child engaged in pick-up bids, is easily soothed when distressed, smiles when reunited with parent etc.

Flaws of Functionalism

47

- Although **Functionalism** is on the right track, it can be **vastly improved** by incorporating into it the **core insight** of basic emotion theory, namely that emotions contain the "wisdom of the ages"
- Key mistake: **Divorcing** relationship realignments **from survival value**, which means ignoring how the **evolutionary past** affects the **present**
- "Functionalism in emotion theory is concerned **not with evolutionary survival value**, but rather with the link between emotion and what a person is trying to do...A succinct definition of emotion from a functionalist perspective is: The attempt by the person to establish, maintain, change, or terminate the relation between the person and the environment on matters of significance to the person" (J. Campos, R. Campos, & Barrett, 1989)
- There is a **fundamental difference** between attempts to establish, maintain, change, or terminate the relation between the person and the environment on matters of significance which are and which are not informed by a **past history of selection**
- We should think of emotion as a **strategy of relationship reconfiguration** which starts from a **core mechanism** selected in light of its past successes in helping us **deal with recurrent problems**

発達についての機能主義的見解

46

- もし感情が関係的な過程であって、(古い基本感情理論が言っているような) **反射的な反応の連鎖**ではないのだとしたら、言語獲得前の子どもが特定の感情を有しているかどうかの測定を、**表情の動きを単にチェックするだけ**で行うことはできない
- 所与の**行為傾向が関係文脈**の中で示されるかどうかを**チェックする必要がある**
- 行為傾向の性質には、**多面的に発現する**というものがあるため、**注意深く観察して、機能的等価性に敏感になる**とおく必要がある
 - 例：Sroufe and Waters (1977) は母子関係において**近接性の希求傾向**を測定する際、実際の物理的距離を測るのではなく、子どもが抱き上げてもらうとうとうといていたか、**苦痛を感じたときに容易になだめられるか、養育者と再会したときに笑顔になるかをチェックする必要がある**と提案している

機能主義の欠点

48

- **機能主義**の方向性は間違っていないものの、基本感情理論の**洞察**(感情には「最年の知恵」が込められている)を取り入れることで**大幅に改善**する余地はある
- 重要な誤り：関係性の再編を**生存上の価値から切り離す**こと。つまり、**進化的な過去がいかに現在に影響を及ぼしているのかを無視すること**
- 「感情理論における機能主義は、**進化的な生存価値ではなく**、感情と行おうとしていることのつながりに関心を寄せる...機能主義的視点からの重要な感情の定義は、自分にとって重要な事柄に関する環境との関係を構築・維持・変化・終結させようとする試みである」(J. Campos, R. Campos, & Barrett, 1989)
- 重要な事柄に関する環境との関係を構築・維持・変化・終結させようとする試みる際、その事柄が**過去の淘汰の歴史**によってもたらされる場合とそうでない場合とは**根本的に違い**がある
- 感情は、**繰り返し生じる問題への対処**を助けた、という過去の成功例に照らし合わせて選択された**コア・メカニズム**から始まる**関係性の再構成戦略**と考えるべきである

Old BET Meets the Motivational Tradition

49

- At the heart of the Motivational Tradition in affective science is Dewey's reaction against James:
 "Hope, fear, delight, sorrow, terror, love, are too important and too relevant in our lives to be in the main the 'feel' of bodily attitudes which have themselves no meaning" (Dewey 1894, 12-13)
- Motivational theories of emotions claim that making sense of the importance and relevance of emotions in our lives requires making a central appeal to motivations as constituents of emotions (motivation=internal state/intervening variable that energizes and directs behavior)
- Grounds selectionist stories about emotions – selection cares about what organisms do, not about how they feel
- Allows for emotions to be studied in infants and animals
- Allows unification of emotions across the basic-higher cognitive emotion divide

Restarting from BET's Core Insight

51

- Ekman's core insight again: "[e]ach basic emotion prompts us in a direction that, in the course of our evolution, has done better than other solutions in recurring circumstances that are relevant to our goals" (Ekman and Cordaro 2011, 364)
- We need to introduce two important modifications to BET's understanding of affect programs
 - "A program might be defined as coded or piearranged information that controls a process (or behavior) leading it toward a goal" (Mayr 1992, 128)
- Modification 1: Emotion programs need to lead to action tendencies rather than a reflexive cascade of responses, because this is the only way to offer a plausible solution to the problems basic emotions allegedly evolved to deal with
- Modification 2: There is no reason to restrict the operation of basic emotions to the solution of evolutionary problems – selection pressures for finding a domain-specific solution have been likely with respect to other recurrent problems in our cultural history

古い基本感情理論と動機づけ伝統の出会い

50

- 感情科学における動機づけ伝統の中核は、ジェームズに対するデューイの反応である:
 「希望、恐れ、喜び、悲しみ、激しい恐怖、愛は、私達の生活において非常に重要であり、非常に関連があるため、概ねそれ自体は意味を持たない身体的態度の「感じ」であると考えられない」 (Dewey 1894, 12-13)
- 感情の動機づけ理論は、われわれの生活における感情の重要性と関連性を理解するためには、感情の構成物として動機づけ(動機づけ=内的状態/行動を引き起こし、方向づける介入変数)を中核的なものとして訴える必要があると主張する
- 感情に関する淘汰論者のストーリーの根拠—淘汰は生物がどのようにに感じるかではなく、何をするかに関心がある
- 乳児や動物における感情の研究が可能になる
- 基本感情、高次認知感情という区分を超えて、感情の統一を可能にする

基本感情理論の核心的洞察から再スタート

52

- エクマンの核心的洞察をもう一度: 「(それぞれの)基本感情は、われわれの進化の過程の中で、われわれの目標と関連する繰り返し生じる環境において、他の解決策よりもより良かった方向へとわれわれを駆り立てる」 (Ekman and Cordaro 2011, 364)
- われわれは、基本感情理論のアフェクトプログラムの理解に対して、2つの重要な修正を導入する必要がある
 - 「プログラムとは、プロセス(あるいは行動)を制御し、それを目標へと導く、コード化された、あるいはあらかじめ準備された情報と定義することができるかもしれない」 (Mayr 1992, 128)
- 修正1: 感情プログラムは、反動的な反応の連鎖というよりむしろ行為傾向を導く必要がある。なぜなら、これは基本感情が対処するために進化してきたとされる問題に対するもっともらしい解決策を示す唯一の方法であるからである
- 修正2: 基本感情の働きを、進化的問題の解決に限定する理由はない—領域特異的な解決策を見つけるための淘汰圧は、われわれの文化の歴史において、他の繰り返し生じる問題にも関わっていたかもしない

What Sorts of Problems Require Emotions as Solutions?

53

- Problems with (at least) four characteristics (I call them fundamental problems):
 - Have reliably and recognizably recurred in the natural or cultural history of the species
 - Cannot be negotiated successfully unless various response systems are coordinated in complex ways
 - Cannot be negotiated successfully through the same coordinated response in all circumstances
 - Involve high personal costs if not dealt with properly
- Basic Six Evolutionary Problems:
 - Problem: Removing a source of obstruction → Solution: Anger
 - Problem: Avoiding predators → Solution: Fear
 - Problem: Avoiding contaminating entities → Solution: Disgust
 - Problem: Progressing towards goals → Solution: Happiness
 - Problem: Disengaging from goal pursuit → Solution: Sadness
 - Problem: Dealing with novel stimuli → Solution: Surprise

Expanding BET to New Emotions

55

- Additional fundamental problems likely to require a domain-specific solution:
 - Problem: Repairing intimate relationships damaged by harm done → Solution: Guilt
 - Problem: Fostering positive, non-conflictual and community building interactions with conspecifics → Solution: Amusement
 - Problem: Promoting cooperation among non-kin, building up mutually reciprocal relationships → Solution: Compassion
 - Problem: Promoting social distancing from target appraised as intrinsically unworthy and threatening to group identity → Solution: Contempt
 - Problem: Reinforcing reciprocity and group cohesion among non-kin → Solution: Gratitude
 - Problem: Mitigating costs of social mistakes by appeasing audiences → Solution: Embarrassment

解決策として感情が必要な種類の問題とはなにか？

54

- 問題には少なくとも4つの特徴がある私にはそれらを基本的問題と呼ぶ):
 - その種の自然史または文化史において確実かつ認識可能な形で繰り返し生じてきた
 - 様々な反応システムが複雑な方法で調整されない限り、うまく切り抜けることができない
 - 全ての環境において同じ調整された反応を使用しても、うまく切り抜けることができない
 - 適切に対処できなければ、高い個人的コストが生じる
- 基本的な6つの進化的問題:
 - 問題: 障害の原因を取り除くこと → 解決策: 怒り
 - 問題: 捕食者を避けること → 解決策: 恐れ
 - 問題: 汚染されたものを避けること → 解決策: 嫌悪
 - 問題: 目標へ前進すること → 解決策: 喜び
 - 問題: 目標追求をやめること → 解決策: 悲しみ
 - 問題: 新規刺激に対処すること → 解決策: 驚き

新しい感情への基本感情理論の拡大

56

- 特定領域の解決策を求めるような追加の基本的問題:
 - 問題: 加害によって傷ついた親密な関係性を修復すること → 解決策: 罪悪感
 - 問題: 同種個体との間で、ポジティブで対立がなく、コミュニティを構築する相互作用を育むこと → 解決策: 楽しみ
 - 問題: 非親族間での協力を促進し、相互恵的な関係を築くこと → 解決策: コンパッション
 - 問題: 本質的に価値がなく、集団アイデンティティを脅かすものと評価する対象から社会的距離を取ることを促進すること → 解決策: 軽蔑
 - 問題: 非親族間の互恵性と集団団結力を強化すること → 解決策: 感謝
 - 問題: 周りの人をなだめることで、社会的誤りのコストを軽減すること → 解決策: 困惑

57

- If a **solution** to these recurrent **problem** were to have been selected, it would consist of...
 - a **mechanism/circuitry/program/system** selected to coordinate a **cluster** of co-occurring organismic changes in body and brain in cooperation with
 - a **general-purpose mechanism** like "regulation/executive control/practical reasoning"
- ...so as to **flexibly**, and yet **quickly**, produce **problem-solving behaviors** in changing contexts
 - McDougall 1919, Frijda 1986: a mechanism which produces action tendencies
 - LeDoux 2014: a survival circuit which leads to **global organismic states**
 - Tooby and Cosmides 2000, Al-Shawaf et al. 2016: a **superordinate program** which manages subordinate cognitive, perceptual, motor and physiological programs
 - Levenson 1999, Scarantino 2014, Tracy 2014, Adolphs and Andler 2018: a **central motive state** which potentiates behavioral options

58

- こうした繰り返し生じる**問題**に対する**解決策**が**選択**されてきたならば、それは以下のようなものから**構成**されるだろう...
 - 身体や脳において共同して同時生起する生体の変化のまとまりを**調整**するために**選択**されてきた**メカニズム/回路/プログラム/システム**
 - **調整/実行制御/実践的推論**のような汎用**メカニズム**
- **変化**する状況において、柔軟かつ迅速に**問題解決行動**を生み出すために...
 - McDougall 1919, Frijda 1986: **行為傾向**を生み出す**メカニズム**
 - LeDoux 2014: **包括的な生体状態**を導く**生存回路**
 - Tooby and Cosmides 2000, Al-Shawaf et al. 2016: 下位の認知、知覚、運動、生理的プログラムを**管理**する**上位プログラム**
 - Levenson 1999, Scarantino 2014, Tracy 2014, Adolphs and Andler 2018: **行動選択**を促進する**中核的動機づけ状態**

What Are Basic Emotions According to the New BET?

59

- **Basic*** emotions are **behavioral programs** with dedicated triggering input systems that produce prioritized action tendencies to pursue evolutionarily or culturally fundamental goals while being subject to executive control
 - Dual control structure: actual emotional behavior comes about from the interplay between a prioritized action tendency and a **general-purpose executive capacity** that flexibly manifests (or inhibits) the tendency given the context
 - The reason vs passion dichotomy gets the passions completely wrong
- Note: idea that goal-directed behaviors are managed by dispositional structures which potentiate or depotentiate behavioral options to provide a **general direction of behavior** was at the heart of the theory of **instincts, drives, and needs** in the early 20th century **psychology of motivation**

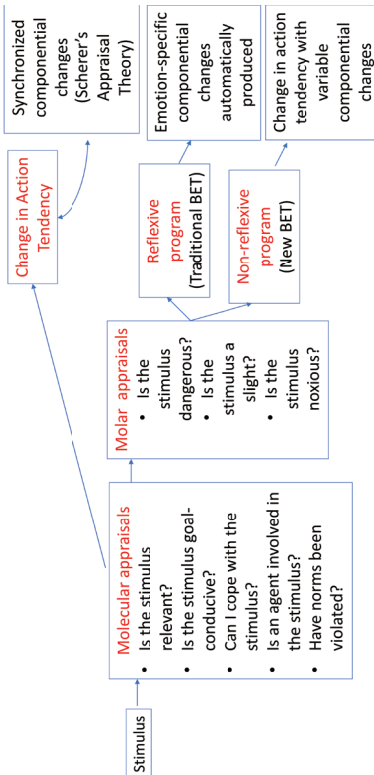
新しい基本感情理論による基本感情とは何か？

60

- **基本*感情**は、進化的または文化的に基本的な目標を追求するために、専用のトリガーとなるインプットシステムを持ち、**実行制御の対象である**と同時に、優先された**行為傾向**を生み出す**行動プログラム**である
- **二重制御構造**: 実際のエモーショナルな行動は、優先された**行為傾向**と、状況に応じてその傾向を柔軟に表す(または抑制する)一般的な**実行能力**との総合作用から生じる
- **理性vs熱情**という二分法は、完全に熱情を誤解している
- 注釈: **目標志向行動**が、行動の選択を促進または抑制する**傾向構造**によって管理され、行動の**全体的な方向**を提供するという考えは、20世紀初頭の**動機づけ心理学**における**本能、動因、欲求**の理論の中であった

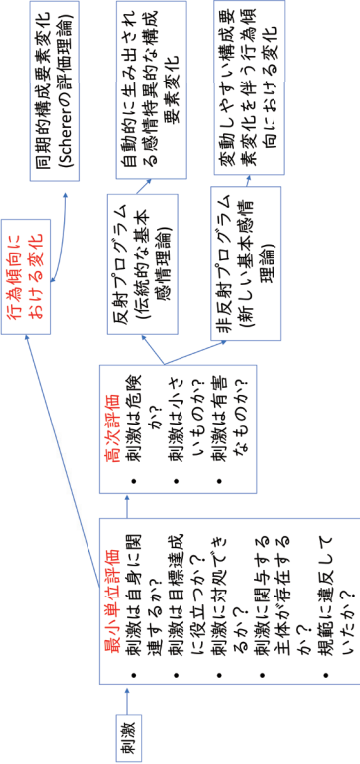
Placing the New BET Within the Motivational Tradition

61



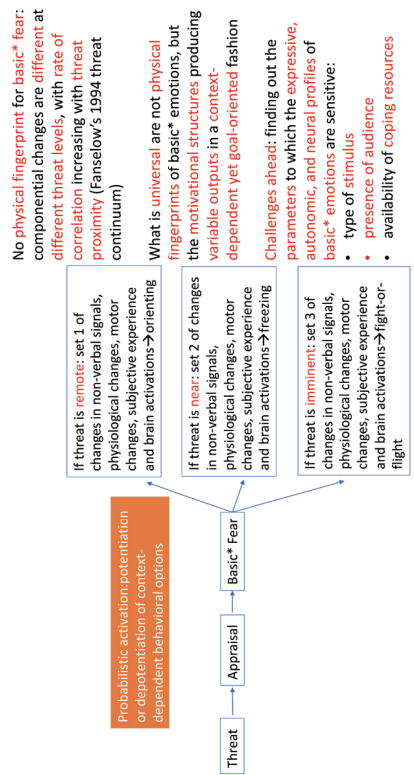
新しい基本感情理論を動機づけ伝統の中に位置づける

62



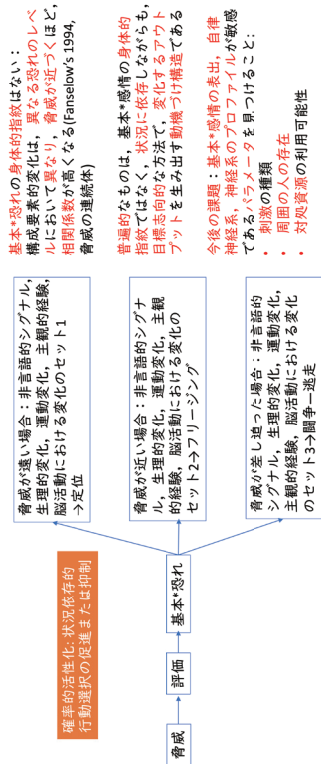
New BET, New Empirical Predictions

63



新しい基本感情理論、新しい経験的予測

64



New Basic Emotion Theory and Development

65

- First, we are no longer distinguishing between **basic emotions** and **emotion schemas**: fear, anger, happiness, sadness, disgust, surprise, interest, guilt, shame, amusement, contempt, compassion, gratitude, embarrassment are all **solutions** to what I have called **fundamental problems**
- Second, if **emotions** are solutions to **fundamental problems**, emotional development essentially amounts to learning to **solve new evolutionary and cultural problems**
- Third, there is **no biologically determined developmental timetable** for all emotions – the core question for a theory of emotional development becomes: at what age does a child learn how to **solve a given fundamental problem**, and learn new **elicitors** for engaging in that solution?
- Fourth, a core emotional competence that changes during emotional development is the shift from **extrinsic** parental regulation of the child's emotions to **intrinsic self-regulation** by the child herself
 - “Because action tendencies are **programs** set for execution, it is in their nature also to be subject to control” (Frijda 1986)

- Two types of **intrinsic regulation** that develop in **toddlers over time**

- **Compatibility control**: monitoring that the ‘goal’ of the action tendency is compatible with other goals of the child (e.g. is getting back at this infant who got my toy compatible with my other goals such as being a good child, receiving praise from my parents, etc.?)
- **Executive control**: monitoring that the ‘goal’ of the action tendency is flexibly adapted to the circumstances at hand (e.g. how do I best get back at an older child who got my toy while in the school's playground?)
- Fifth, another **core competence** that develops over time in the ability to feel **second-order** **high** (awareness of feelings), which **relates to conceptualizing** (that psychological constraints consider emotions I consider to simply be the labeling of the feelings associated with emotions)
- Sixth, insofar as a culture is **collectivistic** rather than **individualistic** (e.g. Japan vs. USA; Markus and Kitayama 1991), its **developmental pathway** may show **cultural differences**
 - E.g. shame in highly collectivistic societies may be encouraged more than shame in individualistic societies, because in collectivist societies it is a more desirable response to failure as it reveals concern with a public and interdependent self rather than a private and individualistic self (Boiger et al. 2013)

67

新しい基本感情理論と発達

66

- 第一に、われわれはもはや**基本感情**と**感情スキーマ**を区別していない：恐れ、怒り、喜び、悲しみ、嫌悪、驚き、興味、罪悪感、恥、楽しみ、軽蔑、コンパッション、感謝、困惑は、すべて私が**基本的問題**と呼んでいるものに対する**解決策**である
- 第二に、もし**感情が基本的な問題**に対する**解決策**であるならば、**感情発達**は、本質的に**新たな進化的または文化的問題を解決**するための学習であることを意味する
- 第三に、全ての感情にとって**生物学的に決められた発達スケジュールはない**——**感情発達**の理論の核心的問いは次のようになるだろう：子どもはどの年齢で、**与えられた基本問題を解決する方法**を学び、また**その解決策に関わる新たな誘発因子**を学ぶのかである
- 第四に、感情の発達中に変化する中核の**エモショナルコンピテンス**は、子どもの感情に対する**外的な親の調整**から、子ども自身による**内的な自己調整**へと変化する
 - 「なぜなら、**行為傾向は、実行のためにセットされたプログラムであり、その本質としても制御の対象となる**」 (Frijda 1986)

- **幼児期に時間をかけて発達する2種類の内的調整**

- **互換性制御**: 行為傾向の「目標」が子どもの他の目標と互換性があるかを監視すること (e.g. 私のおもちゃをとったこの乳児に仕返しをすることは、良い子でいる、両親からはめられるというような他の目標と向立するののか?)
- **実行制御**: 行為傾向の「目標」が目の前の環境に柔軟に適応されているかを監視すること (e.g. 園庭にいる間に私のおもちゃを取った年上の子どもにどうやら一番良い仕返しができる?)
- 第五に、**二次的のフィードバック**(フィードバックに対する意識を感じる能力において) **けて発達する他の中核的コンピテンス**は、**概念化能力**が**必要**である(心理学的構成主義が感情と考えるものを、私は単に感情に付随するフィードバックのラベリングであると考えている)
- 第六に、ある文化が**個人主義**ではなく**集団主義**である限り(e.g. 日本 vs. アメリカ; Markus and Kitayama 1991), その**発達経路は文化的差異を示す**かもしれない
 - e.g. 高度に集団主義的な社会での恥は、個人主義社会における恥よりも奨励されることがある。なぜなら、**集団主義社会では、これは私的に個人主義的な自己ではなく、公的に相互依存的な自己への関心を明らかにする**ため、失敗に対するより望ましい反応であるからである (Boiger et al. 2013)

68

Conclusion

69

- I have sketched a theory of **basic* emotions** as **motivational structures** that govern, jointly with executive control, the choice, activation, and termination of **behavioral sequences** aimed at solving **fundamental** evolutionary and cultural **problems**
- The theory develops the **evolutionary inspiration** of Ekman's approach while removing the idea that basic emotions are defined by reflexive patterns of responses – basic* emotions are manifested by **action tendencies** with highly variable outputs
- **Emotions** as I understand them are **better** than other solutions to **recurrent fundamental problems** because they combine **speed** and **flexibility** by instantiating a **dual action control structure**
- **Emotional development** amounts to **learning how to solve new fundamental problems** over time, and learning how to engage in **intrinsic regulation** of emotions, which involves crucially learning **compatibility control** and **executive control** (note that these two forms of regulation do not exist in the context of the Old BET)

結論

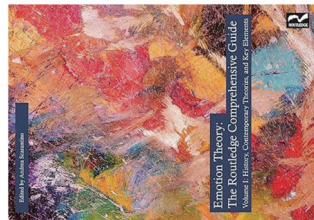
70

- 私は**動機づけの構造**として、**基本*感情**の理論の概略を説明してきた。**動機づけの構造**は、**進化的および文化的な基本的問題**を解決することを目的とした**一連の連続した行動**の選択、活性化、終結を、実行機能とともに調整するものである
- この理論は、**エクマンのアプローチ**である**進化的着想**を発展させながら、**基本感情が反射的反応パターン**によって定義されるという考えを除外している—**基本*感情**は、非常に**変化するアウトプット**を伴う**行為傾向**によって表されるものである
- 私の理解では、**感情**は、**繰り返し起こる基本的問題**に対する**他の解決策よりも優れている**。なぜなら、これらは、**二重の行為制御構造**によって**具体化**されることで、**迅速さと柔軟さを兼ね備えているためである**
- **感情の発達**は、**時間をかけて新たな基本的問題を解決する方法を学ぶこと**、そして**感情の内的調節**に関わる**方法を学ぶこと**を意味し、**互換性制御と実行制御**を学ぶことを含む（これら2つの調整形態は、古い基本感情理論の文脈においては存在しないことに注意）

Lots of the ideas sketched today are discussed in depth here...

71

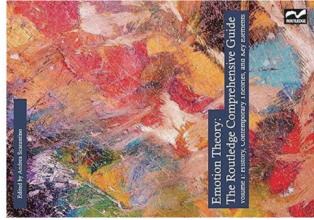
- Publication date: July 23, 2024
- 2 volumes
- 101 Authors
- 62 chapters
- Approx. 800,000 words



本日概説した多くのアイディアは、ここで詳細に議論されている...

72

- 出版日：2024年7月23日
- 2巻
- 著者101名
- 62章
- 約 800,000 語



Thank you!

73

• I want to deeply thank Sera Muto, Mariko Shirai, Yukako Ishii, and Makoto Nakamura for the invitation to Japan, the organization of my visit and all the guidance they have provided me in getting to Japan to give these lectures. Much appreciated!

• I also want to thank the following institutions for organizing and sponsoring this lecture:

- Japan Society of Developmental Psychology (JSDP)
- The international research committee of the JSDP
- Center of Developmental Education and Research (CODER)
- Institute for Education and Human Development (IEHD), Ochanomizu University

• I am now ready to take your questions

ありがとうございました！

74

• 日本へ招待し、渡航や講演会の開催に際して、たくさんの助言をいただいた、武藤世良氏、白井真理子氏、石井佑可子氏、中村 真氏には深く感謝の意を表する。ありがとうございます！

• また、この講演会を企画し、後援してくださった以下の機関にも感謝する

- 日本発達心理学会(JSDP)
- 日本発達心理学会国際研究交流委員会
- 発達科学教育センター (CODER)
- お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所(IEHD)

• 質問どうぞ

(日本語訳：白井真理子・石井佑可子・武藤世良・中村真)